

江崎家の近代

—福王流ワキ方能楽師の明治・大正・昭和—

期間：2021年3月1日（月）～4月30日（金）

場所：神戸女子大学古典芸能研究センター展示室

ワキ方福王流の名門・江崎家は、江戸時代から300年にわたって、姫路を拠点に活動を続けてきました。江崎家の家伝によると、先祖は青山宗勝（修理亮）という天正（1573～1592）頃に越前の丸岡城主だった武将です。宗勝は、徳島藩祖の蜂須賀家政の従弟で、丹羽長秀の娘婿だったとされます。この宗勝の子孫とされる江崎隼人が、初めて江崎姓を名乗った人物とされ、江崎の名は蜂須賀家政から賜ったと伝わります。能楽師の家系としての江崎家初世は、隼人の孫に当たる江崎正左衛門直継（直次・享保6年〔1721〕77歳没）です。直継は、もと春藤流のワキ方で京都在住でしたが、姫路藩主本多忠国の時代に召し抱えられ、元禄8年（1695）に姫路に移住しました。福王流には2世江崎正左衛門直行（宝暦4年〔1754〕没）の時代に転流したとされますが、詳細は未詳です。以後、明治維新を迎えるまで、江崎家の当主は代々姫路藩のお抱え能楽師として活動しました。

2015年度、神戸女子大学古典芸能研究センターは、江崎家から約千点にのぼる貴重な能楽資料の寄贈を受け、2016年には一部の資料を用いた企画展「ワキ方福王流の謡と歴史—江崎家旧蔵資料を中心に—」を開催しました。このたび、江崎家旧蔵資料を紹介する第2回目の展示を、「近代の江崎家」をテーマに行います。ここでいう近代は、明治・大正・昭和の時代を対象とし、江崎家の歴代当主は以下の人々となります。

7世江崎金次郎直郷（前名千之助・後名金左衛門）

天保3年～明治29年（1832～1896） 65歳没

8世江崎文次郎直雄

文久2年～大正14年（1862～1925） 64歳没

9世江崎金次郎（欽次朗）直康（前名菊次・後名正左衛門）

明治22年～昭和45年（1889～1970） 82歳没

10世江崎金治郎直質（前名茂・後名正左衛門）

大正元年生～昭和62年（1912～1987） 76歳没

明治維新、コレラの大流行、太平洋戦争など、多くの困難が日本を襲った激動の時代に、江崎家の代々の当主は、どのような活動を通して能楽を守り広めていったのでしょうか。その足跡を数々の資料とともに辿ります。

【参考文献】

■第25回能楽フォーラム「福王流の歴史と芸風①—播州江崎家の伝承から—」（2015年12月20日開催）配付資料：研究報告「ワキ方江崎家小史」朝原広基著

■神戸女子大学古典芸能研究センター企画展「ワキ方福王流の謡と歴史—江崎家旧蔵資料を中心に—」展示目録（増補版・2016年9月24日発行）

I 明治維新の混乱

明治維新による幕藩体制の崩壊は、それまで式楽として江戸幕府や諸藩の保護を受けていた能楽師たちに大きな打撃を与えました。幕府や藩からの俸禄がなくなり、従来通りの生活が立ち行かなくなった能楽師たちは、大半が廃業や転職を余儀なくされ、能楽界は危機的な状況に陥ります。姫路藩お抱えのワキ方能楽師だった江崎家も例外ではなく、幕末の文久2年（1862）に江崎家7世を相続した江崎金次郎直郷が、経済的困窮から元藩主の酒井忠邦あてに作成したとみられる嘆願書写（展示番号1）が、江崎家旧蔵資料に含まれています。その後も、福王流の管理・運営権をめぐる観世宗家と福王宗家の対立や、日本全国に多数の患者と死者を出したコレラの大流行など、明治期の江崎家には多くの困難が降りかかりました。

2

～近代の江崎家当主 その①～

7世江崎金次郎直郷

前名千之助・後名金左衛門。天保3年～明治29年（1832～1896）65歳没。

姫路船場（姫路城南西の城下町）の神吉貴輔信次（喜一郎）の息男として出生、6世江崎仙（千）右衛門直言の養子となる。弘化2年（1845）に14歳で江戸に下り、ワキ方福王流宗家13世福王丑之進盛風に師事、文久2年（1862）に6世直言が亡くなると、31歳で江崎家7世を相続した。直郷が作成した「明治十年四月五日付江崎金次郎嘆願書写」（展示番号1）によると、相続に当たり直郷には、姫路藩から1人扶持の支給と名字御免が言い渡されている。明治4年（1871）に、廃藩置県のため旧藩主の酒井忠邦が知藩事の職を解かれ、東京に移住することになった際には、名残の献能に出勤し、酒井家の紋付の羽織を拝領した。姫路藩の廃止に伴い、歴代の江崎家当主が受け継いだ姫路藩お抱え能楽師としての立場も、直郷の代で最後となった。

ちなみに、「明治十年四月五日付江崎金次郎嘆願書写」の記述から、江崎家は代々切米10俵の支給だったが、先代の6世直言の時代に2人扶持となり、それが7世直郷の相続を機に1人扶持になったことが知られる。この俸禄に門弟からの指導料や姫路藩以外での演能料などを合わせた収入によって、明治維新までの江崎家は生計を立てていたと推測される。

幕末に家督を継いだ直郷は、明治維新による劇的な環境の変化、福王流の管理・運営権をめぐる観世宗家との対立、コレラの全国的流行などの苦境を乗り越え、ワキ方能楽師としての江崎家の芸系を守り抜き、次代に引き継いだ。

1. 明治十年四月五日付江崎金次郎嘆願書写

大本 袋綴（仮綴） 1冊 明治10年（1877）写 江崎家旧蔵資料蔵

ワキ方福王流7世江崎金次郎直郷が、酒井忠邦あてに作成したとみられる嘆願書の写し。明治4年（1871）12月に姫路藩からの扶持が打ち切られた江崎家への経済的支援を懇願する内容。明治政府は明治4年の廃藩置県後も華族・士族に従来の秩禄を支給していたが、膨大な財政負担のため明

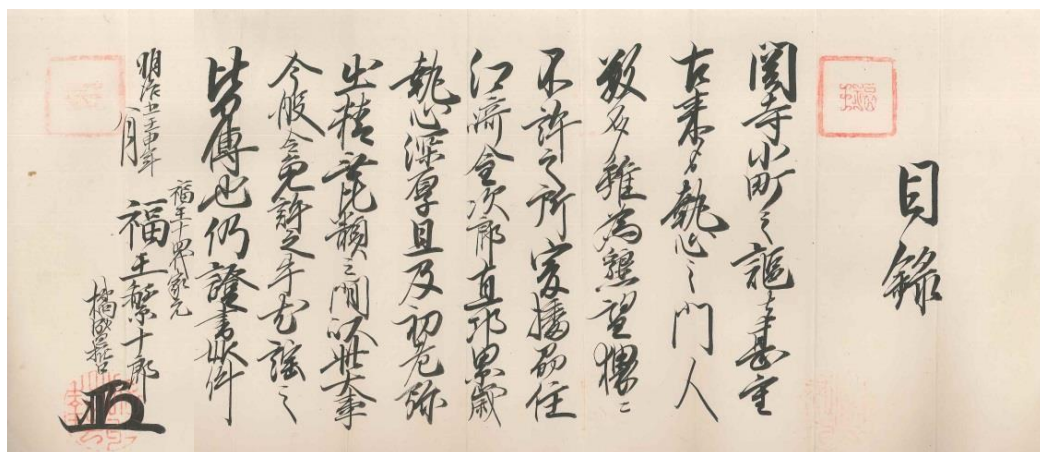
治9年に秩禄処分を実施し、それらを全廃した。直郷が明治10年に嘆願書を作成したのは、直接的には、そうした政策の影響とみられる。明治維新によって幕藩体制が崩壊し、諸藩に召し抱えられていた多くの能楽師が生活の糧を失った。代々姫路藩お抱えの能楽師だった江崎家にも、大きな打撃となった様子がかがえる。嘆願書の提出先とみられる酒井忠邦は、姫路藩最後の藩主で、明治4年7月の廃藩置県まで姫路藩知事をつとめた人物。嘆願書の後に、嘆願書よりも少し大きめの無罫紙2丁に記された「履歴書」が、一緒に仮綴じされている。



2. 明治五年八月付福王繁十郎盛哲より江崎金次郎あて「関寺小町」謬免状

一枚物 1枚 明治5年(1872)写 江崎家旧蔵資料蔵

明治5年8月付で、ワキ方福王流宗家の14世福王繁十郎盛哲が、7世江崎金次郎直郷に授けた「関



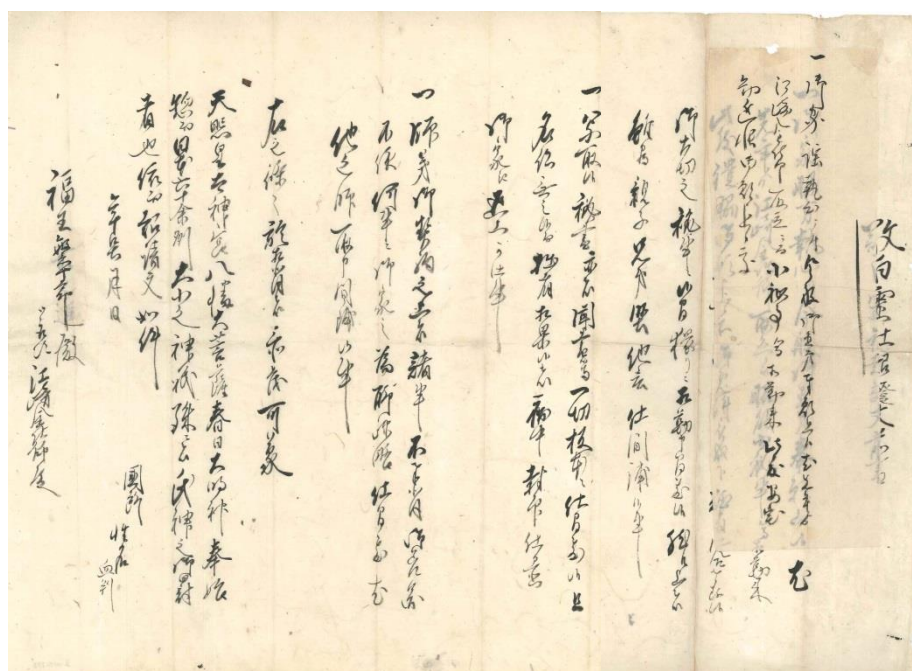
寺小町」の謬の免状。この伝授をもって直郷が「謬之皆伝」となった旨が記されている。廃藩置県が実施された翌年に作成された免状であり、明治維新直後の混乱期にも、最奥の秘伝の継承が行われていた様子がかがえる。

3. 福王繁十郎あて「礼脇」相伝起請文案

一枚物 1枚

江戸後期～明治初期頃写
江崎家旧蔵資料蔵

福王宗家から「礼脇」が伝授される際に提出した起請文の草案。末尾の宛名は「福王繁十郎殿」(14世繁十郎盛哲・明治31年[1898]没)とあるが、「繁十郎」の部分には貼り紙となっており、貼り紙の下には先代の「丑之進」



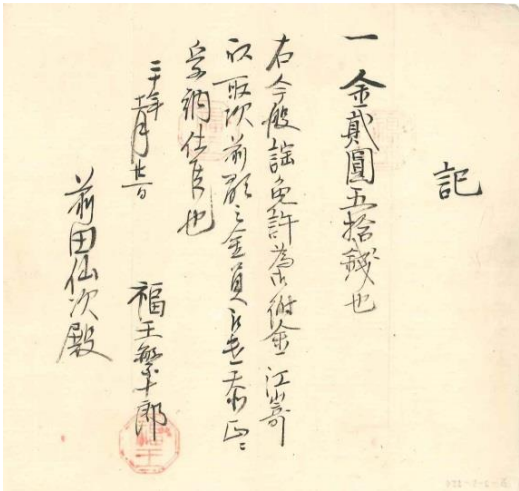
(13 世福王丑之進盛風) の名が書かれていることから、盛風時代と同じ書式の草案を、そのまま引き継いで使用していたものとみられる。取次は「江崎金次郎殿」(6 世仙右衛門直言か7 世金次郎直郷) とある。一つ書きの1ヶ条目に「一、御家協方執心ニ付今般御直弟奉願上候、尤先年方江崎金次郎取立ニ而脇能小秘事等相勤来、此度礼脇御願上候所、御免許被成下難有仕合奉存候」とあり、「礼脇」の相伝には福王宗家の直弟子になることが条件だったらしい。また、一つ書きの1ヶ条目に紙片が貼付され、「安宅勸進帳」の伝授に合わせて必要箇所が改訂された草案が記されている。

「礼脇」は、翁付の脇能で演じられる特別な演出で、一曲の冒頭でワキが置鼓の囃子で登場した後、常座で両手をついて拝礼する。

4. 明治二十年十一月二十一日付福王繁十郎より 前田仙次あて謡免許謝金受領証

一枚物 1枚 明治20年(1887)写 江崎家旧蔵資料蔵

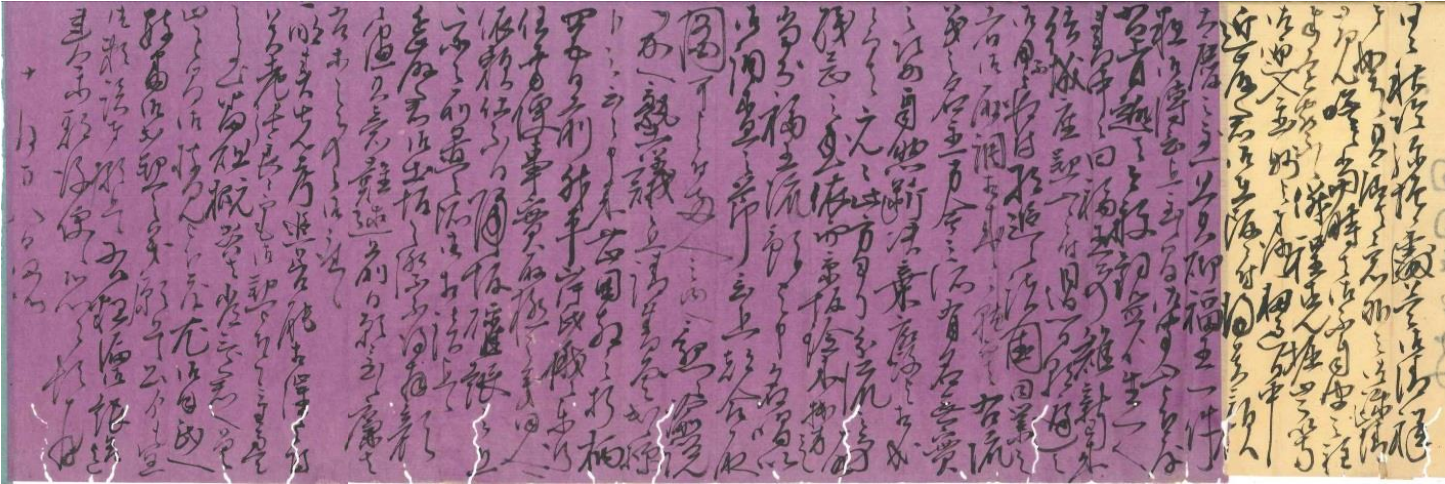
明治20年11月21日付で、14 世福王繁十郎盛哲が前田仙次にあてた、謡免許伝授で支払われた謝金の受領証。金額は「金式円五拾銭」とある。「取次」の「江崎」は7 世江崎金次郎直郷とみられる。福王流における免状発行のシステムが、明治20年当時に機能していた様子がうかがえる。



5. 年未詳十月二十八日付中村伊次郎より江崎老兄あて書簡

継紙 1点 明治期写 江崎家旧蔵資料蔵

年未詳 10 月 28 日付で、中村伊次郎が7 世江崎金次郎直郷にあてた書簡。差出の中村伊次郎は、筆跡から直郷と同じ福王流高弟で、大阪在住の10 世中村弥三郎知鐘(大正8年(1919)71 歳没)とみられる。書簡には、シテ方観世流22 世宗家の観世清孝(明治21年〔1888〕52 歳没)が、福王流の管理・運営を、福王宗家ではなく観世宗家側で取り仕切る検討を始めたことが記されている。大阪の観世流シテ方「生一」(きいち・10 世左兵衛か)が、清孝からの書簡でそのことを知り、知鐘に伝えたところ、早速、知鐘が直郷に報告した。書簡では、清孝が検討し始めた理由として、明治維新後、福王流の活動実態が見えず、このままでは流義が消失してしまうことへの危機感のあったことが挙げられている。幕藩体制下で福王流が観世座付であったことから、観世宗家の清孝は、引き続き関係する流儀全体を統率すべき立場にあると考えたのであろう。しかし、清孝の提案は、今後の福王流における免状発行権や演能活動の在り方に関わる重大案件であることから、知鐘や直郷を初め、福王流の弟子家に与えた衝撃は極めて大きかったと思われる。「明治十五年二月改正福王流謡

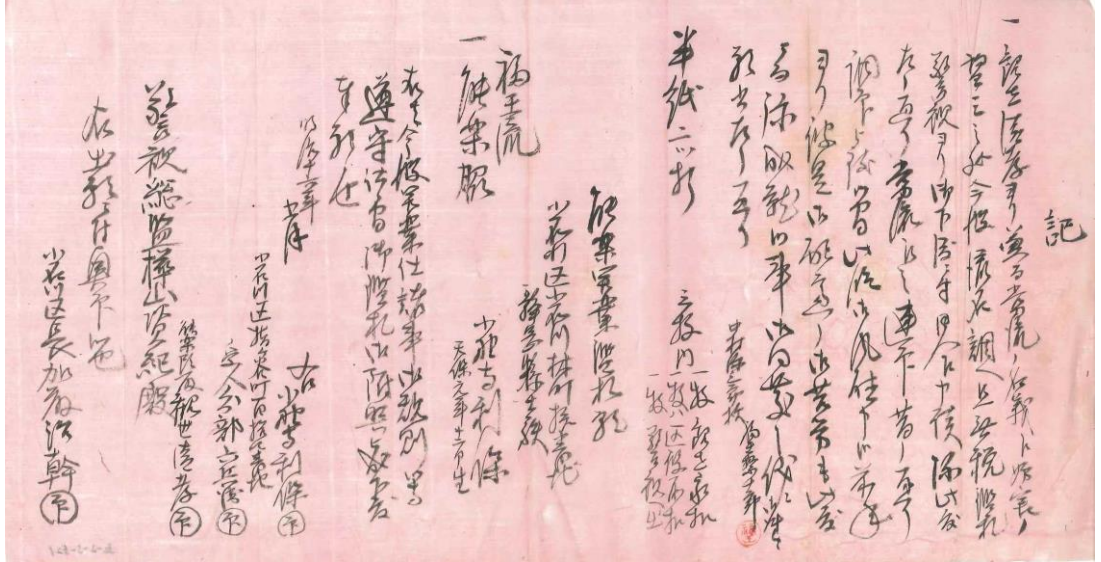


習順目録」(展示番号7)の添え状部分に、この一件の和解が叶ったことがうかがえる記述があることから、この書簡が出されたのは、明治13年(1880)か同14年頃と推定される。江崎家旧蔵資料には、この一件に関わり、知鐘が直郷にあてた書簡が複数点所蔵されており、知鐘が解決に向けて苦心を重ね、たびたび直郷に報告・相談していた様子を知ることができる。

6. 明治十六年福王繁十郎より中村弥三郎あて書簡

一枚物 1枚 明治16年(1883)写 江崎家旧蔵資料蔵

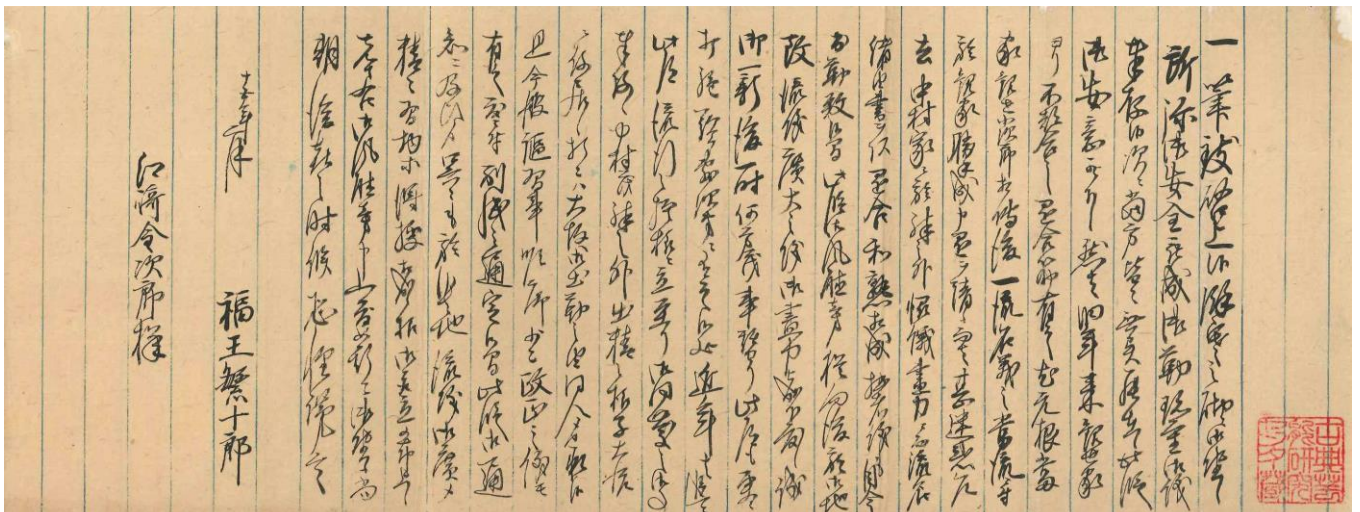
ワキ方福王流14世宗家の福王繁十郎盛哲が、10世中村弥三郎知鐘にあてた書簡。シテ方観世流宗家の22世観世清孝は、かねてより福王流の名義に対し「妨害」の意志を示していた



が、それに対抗すべく、盛哲の門弟である小野寺利保が「能楽開業鑑札願」を清孝の連印とともに提出し、これにより福王流の名義問題が解決し、福王宗家が従来通りの立場で活動可能になったことを報告する内容。書簡後半は、この時に作成した「能楽開業鑑札願」の写しとなっており、明治16年5月付で、東京小石川区在住の静岡県士族小野寺利保が、福王流ワキ方として開業および鑑札発行を願い出ている。また、願書の日付が明治16年5月であることから、書簡が書かれたのも同時期とみて差し支えないであろう。福王盛哲は一件落ち着いたことを吹聴してほしいと記しており、知鐘は盛哲からの書簡を7世江崎金次郎直郷に転送している。

7. 明治十五年二月改正福王流謡習順目録

継紙 1点 明治15年(1882)写 江崎家旧蔵資料蔵



* 図版は添え状部分のみ

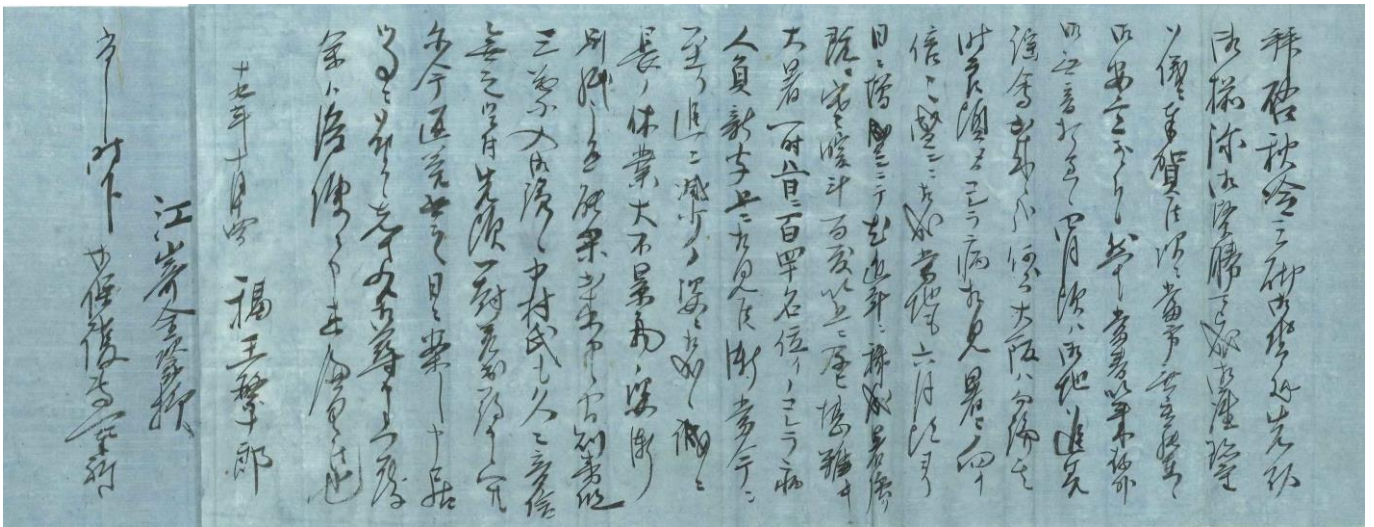
ワキ方福王流 14 世宗家の福王繁十郎盛哲が、7 世江崎金次郎直郷に送った、明治 15 年 2 月改正の福王流における謡伝授階梯目録。この目録を盛哲が直郷に送った時の添え状が、目録とともに台紙に貼付されている。添え状からは、明治維新の混乱をようやく乗り越えた盛哲が、姫路における福王流の勢力拡大を直郷に期待していたことが知られる。さらに、添え状には、維新後、シテ方観世流 22 世宗家の観世清孝が、福王流の名義を観世宗家側に移譲するよう働きかけ、その和解に向けて福王流の高弟 10 世中村弥三郎知鐘が尽力した一件についても触れられており、心機一転した盛哲が改めて福王流の運営に力を入れ始めた様子うかがえる。

8. 明治十九年十月十四日付福王繁十郎より江崎金次郎あて書簡

継紙 1 点 明治 19 年 (1886) 写 江崎家旧蔵資料蔵

14 世福王繁十郎盛哲が、7 世江崎金次郎直郷にあてた書簡。大阪でのコレラ大流行が収束しはじめたため、ようやく能会が開催できるようになり、その番組を 3 葉送付したことを告げる。文中で「中村氏」の消息についても心配しているが、この「中村氏」は、同じ福王流ワキ方の 10 世中村弥三郎知鐘とみられる。

日本に初めてコレラ菌が持ち込まれたのは、江戸後期の文政 5 年 (1822) であり、清から朝鮮半島を経由して上陸したとされる。その後、幕末から明治時代前期に至るまで、たびたび大流行を繰り返し、明治 10 年、同 12 年、同 15 年、同 19 年、同 23 年には、全国で多数の患者が発生した。特に、明治 12 年と同 19 年の大流行は凄まじく、全国で 15 万人以上の患者と 10 万人以上の死者を出した。本書簡には、そのうち明治 19 年のコレラ大流行について記されており、その時の大流行が、関西の能楽界にも深刻な打撃を与えた様子うかがえる。



Ⅱ 能楽界の復活と江崎家

—明治後期から昭和初期—

明治維新がもたらした能楽界の混乱も、明治 15 年（1882）前後には復活に向けた動きが活発化し始めます。明治 20 年代以降の江崎家は、引き続き 7 世江崎金次郎直郷が当主をつとめ、その跡を息子の 8 世江崎文次郎直雄が引き継ぎました。この時期、明治 20 年 5 月に直郷が兵庫県尋常中学校開校式の記念能で《望月》のワキを演じ（展示番号 9）、同 32 年 5 月に直雄が師団設置大祝祭典余興能に出演するなど（展示番号 10）、江崎家の人々は地元の姫路の近代化に歩調を合わせた演能活動を行っています。直郷と直雄は、同時に門弟の育成にも尽力しており、明治 43 年に直雄に提出された弟子入りの際の起請文（展示番号 12）が、江崎家旧蔵資料に含まれています。

実は、明治後期は福王流にとって波乱の時期であり、明治 31 年に 14 世福王繁十郎盛哲が没した後、宗家が断絶してしまいます。宗家不在のまま芸事を預かる立場となったのが、弟子家の 10 世中村弥三郎知鐘でした。以後、江崎家の人々は中村家を支えながら流派の維持につとめていきます。

直雄の跡を継いで明治 43 年から江崎家 9 世となったのは、直雄の甥で養子の江崎菊次（後の 9 世江崎金次郎直康）です。菊次は姫路を活動拠点としながら、能楽隆盛の波に乗って、京阪神の数多くの舞台に出演し評価を高めて行きました。また、大正時代には、知鐘が新作能「大石」を手掛け、江崎家の門弟も、同曲の謡本の刊行に中心的役割を果たしました（展示番号 13）。

～近代の江崎家当主 その②～

8 世江崎文次郎直雄

文久 2 年～大正 14 年（1862～1925）64 歳没。

7 世江崎金次郎直郷の息子（次男力）。菓子商を営みながら謡曲教授を行い、門弟を育成した他、ワキ方として舞台に出演した。福王流は、明治 31 年（1898）に 14 世福王繁十郎盛哲が亡くなると宗家が断絶し、代わりに高弟家の 10 世中村弥三郎知鐘が、芸事預かりの任に収まるという混乱が生じた。「明治三十四年二月付福王家元より江崎文次郎あて「安宅」免状」（展示番号 11）は、この時期、宗家を預かる立場にあった知鐘が、「福王家元」として直雄に授けたものとみられ、二人がともに流儀の維持につとめていた様子がうかがえる。直雄は社中との関係も良好だったらしく、「年末詳五月十四日付中村弥三郎より江崎文次郎・森崎清次郎・社中あて書簡」（展示番号 15）では、知鐘が、社中を導く直雄の人徳を称賛している。大正元年（1912）に隠居し、養子の江崎菊次（後の 9 世江崎金次郎直康）に家督を譲った。

9. 明治二十年五月一日尋常中学校開校式記念能 金剛流「望月」脇セリフ抜書

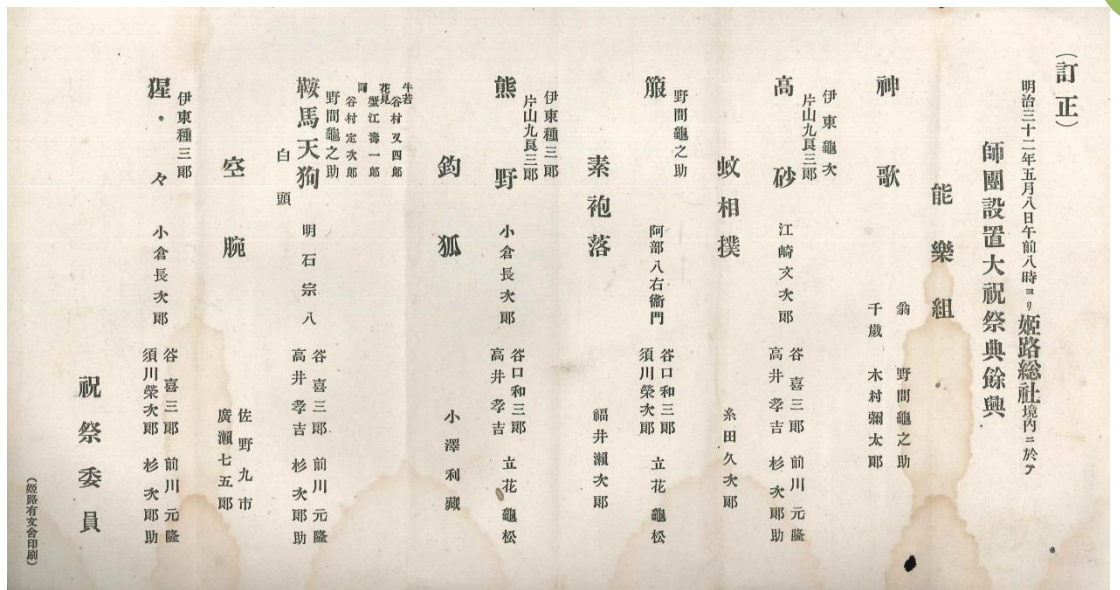
一枚物 1枚 明治20年(1887)写 江崎家旧蔵資料蔵

明治20年5月1日開催の兵庫県尋常中学校開校式記念能において、金剛流シテ方高村太左衛門による能「望月」が上演され、その際にワキをつとめた7世江崎金次郎直郷が用意したワキのセリフの抜書。末尾に「右者明治廿年五月一日尋常中学校開校式ニ付ノ能楽有之候節高村太左衛門か相手勤候節書抜ノキ也ノ金剛流ノ望月」と記されている。明治20年4月に開校した兵庫県尋常中学校は、当時兵庫県唯一の県立中学校であり、現在の県立姫路西高等学校の前身。

10. 明治三十二年五月八日師団設置大祝祭典余興能番組

一枚物 1枚 明治32年(1899)刊 江崎家旧蔵資料

明治31年に第10師団が姫路に設置され、同32年5月8日に、設置を祝う祭典が行われた。本資料は、その余興として、姫路総社(射楯兵主神社)境内において上演された能番組。演目は、「神歌」に始まり、能5

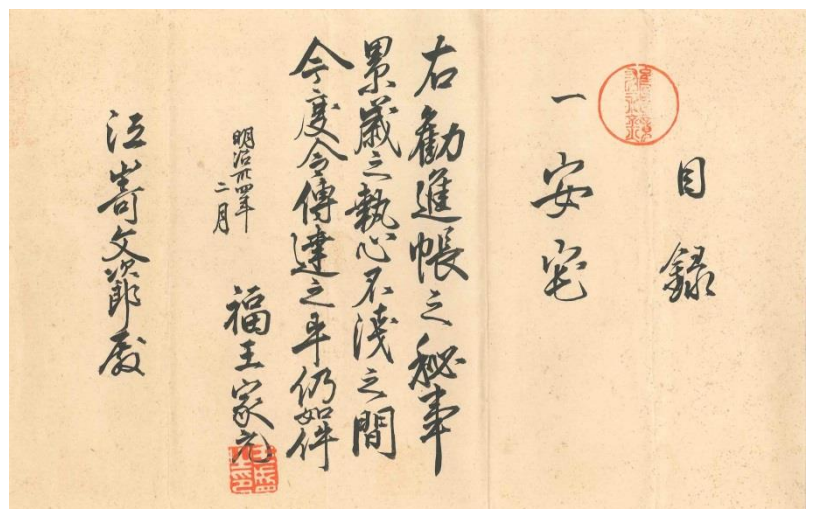


番・狂言4番となっている。片山九郎三郎(7世片山九郎右衛門・後の観世元義)がシテをつとめる「高砂」に、8世江崎文次郎直雄がワキとして出演している。冒頭に「(訂正)」とある通り、もとの番組に変更が生じたため作成された改訂版で、この番組の裏面には訂正前の番組が印刷されており、墨書で修正が施されている。

11. 明治三十四年二月付福王家元より江崎文次郎あて「安宅」免状

一枚物 1枚 明治34年(1901)写 江崎家旧蔵資料蔵

明治34年2月付で、ワキ方の「福王家元」が、8世江崎文次郎直雄に授けた「安宅」の「勸進帳」の免状。福王家は明治31年に中絶したため、差出人に正式な家元の署名はなく、「福王家元」とのみ記されている。紙背に「福王」(朱陽八角印)の割印がある。福王宗家は明治31年に14世福王繁十郎盛哲が亡くなり断絶したが、昭和13年(1938)に弟子家の12世中村弥三郎が15世宗家を継承し再興した。この免状

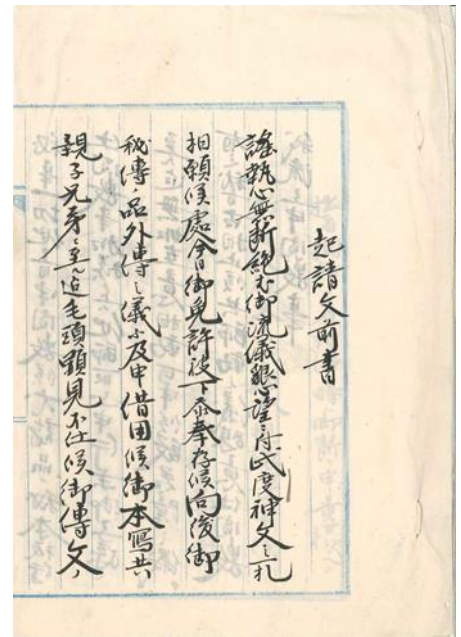


が作成された時期は宗家不在であり、11 世中村弥三郎知微が代理で発行したのであろう。

12. 明治四十三年八月十日糸田廣次より江崎文次郎あて 起請文

半紙本 袋綴（仮綴） 1冊 明治43年（1910）写
江崎家旧蔵資料蔵

姫路市在住の糸田廣次が、ワキ方福王流の江崎家入門するに当たり、明治43年8月10日付で、8世江崎文次郎直雄に提出した起請文。明治期に作成された起請文のため、罫紙を仮綴じた形状など近代らしくなっているが、文面は江戸期の起請文と変わらない。福王宗家が不在の時期だが、関西では高弟の中村家と江崎家が中心となり、福王流の芸統を守っていた。



13. 新作謡本「大石」

半紙本 袋綴 1冊 大正3年（1914）養老社発行・檜常之助印刷 伊藤正義文庫蔵

赤穂義士を題材とした福王流の新作能。もとは花岳寺（かがくじ）の赤穂義士百年遠忌に奉納された作者不明の謡曲の草稿本を、大正2年の赤穂大石神社造営の際に、赤穂の有吉敬三郎・備生栄吉が「義士供養」の題名で京都の永田文昌堂から上梓したものの不備な点が多いため、7世江崎金次郎直郷の高弟だった柴田善太郎が、その版權を購入し、詞章と節付の改訂を11世中村弥三郎知微に依頼して、大正3年6月に刊行した謡本。大正3年2月4日の花岳寺和尚の序文と、「大正式之餘」の年記がある知微の跋文が載る。さらに、この謡本の補訂修正版が、大正13年2月に檜書店から刊行されている。横山柚人「義士祭と新曲大石」（『観世』昭和16年3月号）によると、大正13年版の刊行以降、「大石」は、この補訂修正版が謡われるようになり、昭和15年には花岳寺の法要で、シテ9世江崎金次郎直康、ワキ柴田善太郎による半能形式の「大石」の謡が奉納されている。花岳寺は浅野家の菩提寺として建立された寺院。



梗概を以下に記す。

播州赤穂華岳寺の僧（ワキ）が、東都泉岳寺（せんがくじ）への参詣を志し、旅の途次に山科の里を訪れる。大石内蔵助の旧跡を弔い偲んでいると、里人（前シテ）が現れて礼を述べ、自分の素性を大石良雄（よしとか・大石内蔵助の本名）と明かして姿を消す（中入）。僧が大石の供養をしていると、大石の霊（後シテ）が現れ、仇討までの辛苦と吉良邸討入りの成功の様子を語る。

14. 横山柚人「義士祭と新曲「大石」」（雑誌『観世』昭和16年3月号掲載）

A5判 1冊 昭和16年（1941）檜書店刊 古典芸能研究センター蔵

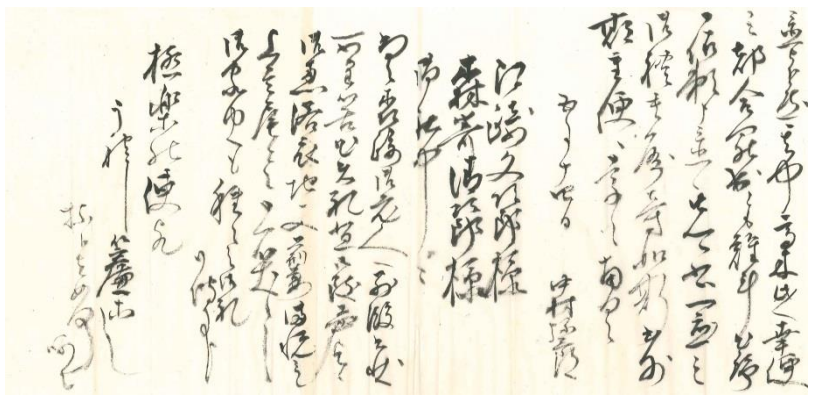
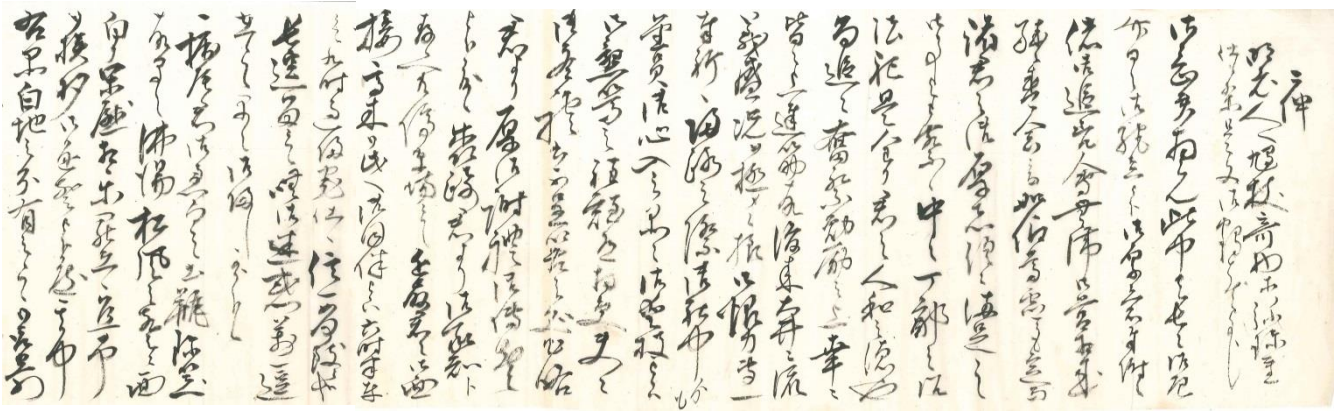
新作能「大石」が制作された経緯を記した文章。筆者の横山柚人（そまびと、本名栄蔵）は、9世江崎金次郎直康と親交が深かった明石在住の能楽研究者。柚人が見学に訪れた昭和15年の赤穂義

土祭では、地元の大石神社における社前祭で、祝詞の奏上と、直康と柴田善太郎翁による「神歌」の奉納が行われ、その後、討入り義士に扮装した一隊が、赤穂義士の墓石のある花岳寺まで練り歩き、本堂の霊前で僧による読経が行われた後、直康（シテ）と柴田翁（ワキ）が半能形式の「大石」を謡ったと記載されている。

15. 年未詳五月十四日付中村弥三郎より江崎文次郎・森崎清次郎・社中あて書簡

継紙 1点 明治期写 江崎家旧蔵資料蔵

年未詳5月14日付で、10世中村弥三郎知鐘が、8世江崎文次郎直雄・森崎清次郎・江崎家社中にあてた書簡。直雄主催の追善会に招かれたとおぼしき知鐘が、その盛会ぶりを称賛するとともに、社中あげてのもてなしに感謝の意を述べた内容。文面から、直雄が社中の弟子たちとともに芸芸の継承につとめ、知鐘から将来の流儀の盛況を期待されていた様子が見えうかがえる。なお、この書簡は、先代の7世江崎金左衛門直郷が亡くなった明治29年（1896）以降に書かれたと推測されるが、この時に催された追善会は、あるいは直郷の供養のために営まれたものかもしれない。宛名の一人である森崎清次郎は、明治27年3月に入門した直郷時代からの門弟。



～近代の江崎家当主 その③～

9世江崎金次郎（欽次郎）直康

前名菊次（菊治）・後名正左衛門。明治 22 年～昭和 45 年（1889～1970）82 歳没。

7世江崎金次郎直郷の実妹ときの息子として誕生する。明治 37 年（1904）に 16 歳で8世江崎文次郎直雄の養子となり、大阪の 10 世中村弥三郎知鐘に師事する。明治 43 年に 22 歳で姫路に帰郷、江崎家9世を継承した。大阪の修業時代の出演記録をまとめた「能楽組」（展示番号 17）には、大阪・京都・兵庫において数多くの舞台に出演し、ワキ方として活躍していた様子がうかがえる。

その後、姫路を拠点に活動を続け、昭和 7 年（1932）には、直康を中心とした江崎家社中が建設に尽力した姫路市公会堂能舞台の舞台披きにおいて、直康がワキをつとめる《道成寺》が上演された（能舞台は空襲により焼失）。昭和 13 年には、前年に福王宗家を再興した 12 世中村弥三郎（15 世福王茂十郎盛登）が、中村・野島の二家とともに江崎家を「直門皆伝之家」に定める構想を書簡で伝えている（展示番号 19）。戦前・戦中は、昭和 11 年から 13 年にかけて、近代の名人と称された初世梅若万三郎がシテを演じる三老女（《姨捨》《檜垣》《関寺小町》）のワキをつとめた他（展示番号 22～27）、太平洋戦争が始まった翌年の昭和 17 年には、大阪の観世流シテ方・大西信久率いる華北演能旅行に参加し、北京・天津・奉天の各地で舞台に上がった（展示番号 28～33・35・38～41）。戦後は体調を崩しながらも演能活動を続け、昭和 25 年には江崎金次郎還暦記念能楽会が開催され（展示番号 42）、同 39 年には姫路市主催の白鷺城復元記念能にも出演している。

大阪の中村弥三郎家とともに福王流の伝統を守った功労者であり、「姫路に江崎あり」と東京の能楽界にも評判を広めるなど、近代における江崎家の発展に大きく貢献した。昭和 36 年に能楽協会理事・神戸支部長に就任。地元姫路への貢献が評価され、昭和 36 年に姫路市教育委員会より表彰、同 38 年には兵庫県文化賞を受賞している。

昭和 38 年の隠居を機に、家督を長男直質に譲り、正左衛門と改名。なお、江崎家の世襲名である「金次郎」を、昭和 13 年に福王宗家を復興した 12 世中村弥三郎（15 世福王茂十郎盛登）に促されるまで名乗らなかった。

16. 大正四年十一月十四日付中村弥三郎知微より 江崎菊次あて書簡

絵葉書 1枚 大正 4 年（1915）写
江崎家旧蔵資料蔵

大正 4 年 11 月 14 日付で、11 世中村弥三郎知微が 9 世江崎菊次（後の 9 世金次郎直康）にあてた絵葉書。



* 図版は葉書裏面

「郵便はがき」の葉書裏に、3人の舞子が並んだ彩色写真が印刷されている。葉書表の宛名と本文は、すべて鉛筆書で、通信欄の本文末尾に「知微」とのみ記されている。大正天皇即位大礼（御大典）は、大正4年11月10日に即位式、14日に大嘗祭が、いずれも京都御所で行われたが、その記念行事として催された大典記念京都博覧会を、母親同行で見物したことが記されている。中村弥三郎知微はワキ方福王流中村家11世で福王宗家代理をつとめた人物。

17. 能楽組

大本三つ切本 袋綴 1冊 明治後期写 江崎家旧蔵資料蔵

福王流ワキ方の江崎菊次（後の9世江崎金次郎直康）が書写した、明治37年（1904）11月から同42年7月までの能番組集。自身が、大阪・京都・兵庫において出演した80日分の催しを、年代順に並べて記録している。最も多く出演した会場は、明治8年（1875）に開設された大阪博物場（*）能舞台。その他、京都の片山舞台・金剛舞台・東本願寺、兵庫の和田神社・射楯兵主神社・福昌寺（八王寺）など、多くの開催地が記されている。江崎菊次（菊治）は明治37年3月に8世江崎文次郎直雄の養子となり、明治43年に江崎家9世を襲名した。明治後期の江崎家の演能活動だけでなく、同時期の関西能楽界の動向を知る上でも貴重な資料。

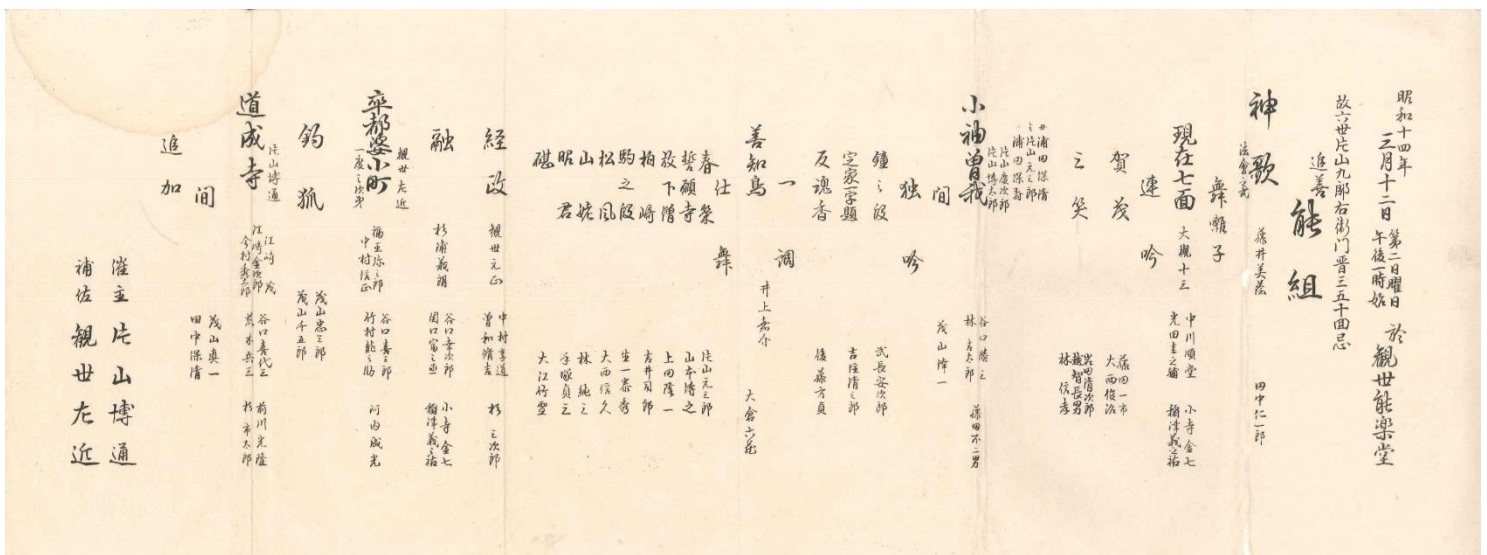
*大阪博物場…現大阪市中央区本町橋。近代大阪の勧業・観光を目的に開設された複合施設で、博物館・美術館・図書館・商品陳列所・能舞台が1箇所併設された。もと大坂西町奉行所の跡地で、慶応4年（1868）より大阪府庁があったが、府庁の移設に伴い大阪博物場が建設された。



18. 昭和十四年三月十二日故六世片山九郎右衛門普三五十回忌追善能組

一枚物 1枚 昭和14年（1939）刊 江崎家旧蔵資料蔵

昭和14年3月12日に京都の観世能楽堂において開催された、6世片山九郎右衛門晋三の五十回忌追善能番組。片山九郎右衛門家は、江戸中期から続く、京都における観世流の統括的立場にある名門。6世晋三は、明治15年（1882）に京都の柳馬場に能舞台を建設するなど、明治維新後の京都能界を復興に導いた功労者として知られる。追善公演では、「神歌」に始まり、能3番・舞囃子3番・

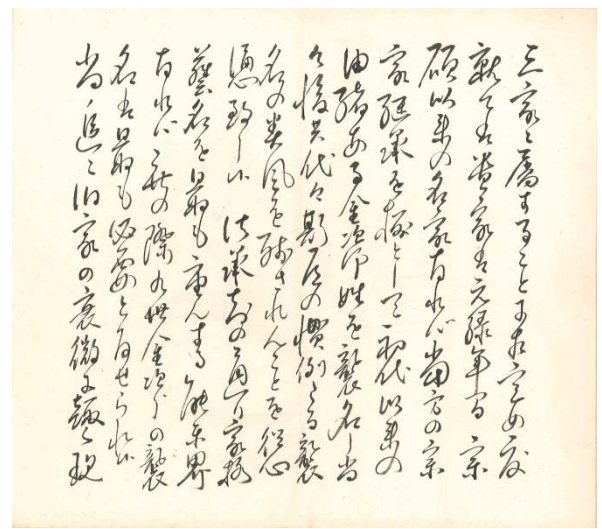
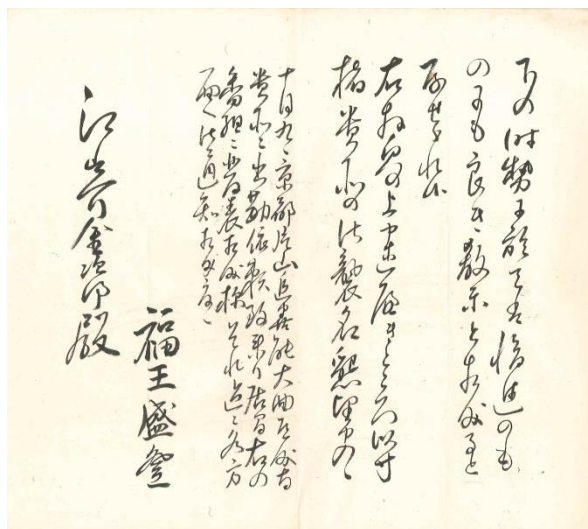
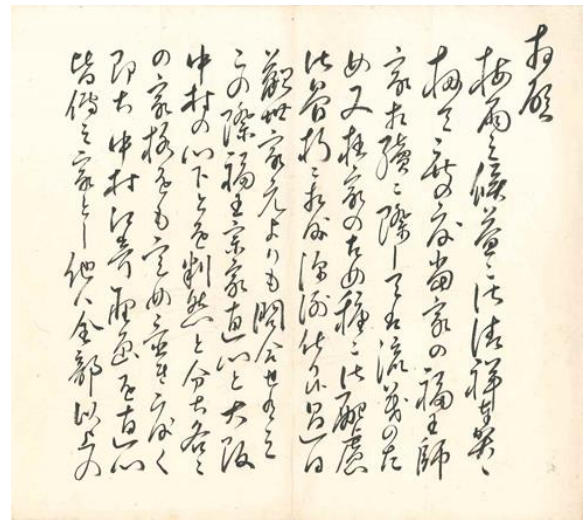


連吟2番・独吟3番・一調1番・仕舞9番・狂言1番・追加が、関西の重鎮らによって上演された。9世江崎金次郎直康は息子の茂（後の10世江崎金治郎直質）とともに、催主の8世片山九郎右衛門博通がシテをつとめる「道成寺」に、ワキとワキツレで出演している。また、24世観世元滋がシテをつとめる「卒都婆小町」に、15世福王弥三郎盛登が出演しており、本公演中の能2番のワキを福王宗家と江崎家が担った。ちなみに、この舞台が、9日後に急逝した24世元滋の最後の舞姿となった。「昭和十三年六月二十二日付福王盛登より江崎金次郎あて書簡」（展示番号19）から、この出演の仲介を15世福王弥三郎盛登（茂十郎）が行ったことが知られるが、当初は3月12日ではなく、10月9日が開催予定日だったらしい。

19. 昭和十三年六月二十二日付福王盛登より江崎金次郎あて書簡

無罫便箋 3枚 昭和13年（1938）写 江崎家旧蔵資料蔵

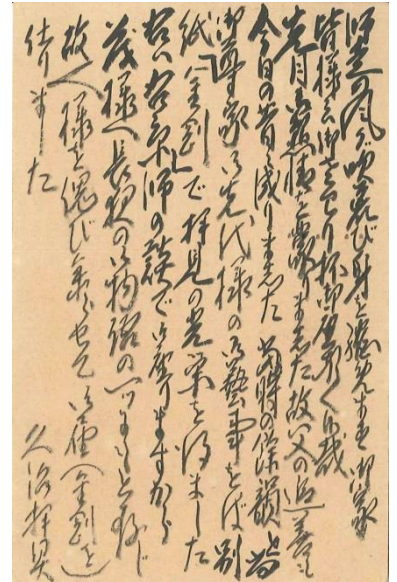
昭和13年6月22日付で、福王流ワキ方15世福王弥三郎盛登（茂十郎）が、9世江崎金次郎直康にあてた封書。白地の便箋3枚に墨書されている。福王宗家は明治31年（1898）に14世福王繁十郎盛哲が没して以来中絶していたが、昭和13年に12世中村弥三郎が再興し宗家15世を名乗って再興した。福王宗家の再興に伴い、江崎家の家格を「直門皆伝之家」と定め、直康に江崎家の「初代以来の由緒ある金次郎姓」を襲名するよう促している。明治43年に江崎家9世を継承した直康だが、この時まで江崎家代々の世襲名である「金次郎」は名乗っていなかった。直康は、この手紙を受け取った直後に金次郎を襲名したらしく、「昭和十三年十月十六・十七日初世梅若万三郎古稀記念能番組」（展示番号24）では、「江崎金次郎」の名で「関寺小町」のワキをつとめている。盛哲が、同じ関西出身の弟子家である江崎家を、福王流発展の柱のひとつとして重視していた様子が見えがえる。



20. 昭和七年十二月十五日付茂山久治より江崎直康あて書簡

葉書 1枚 昭和7年(1932)写 江崎家旧蔵資料蔵

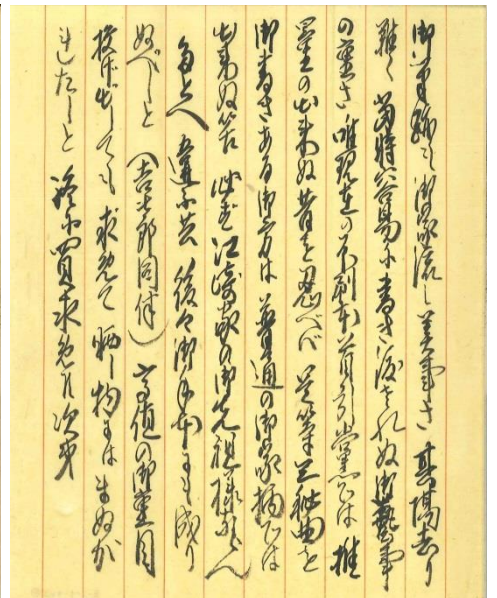
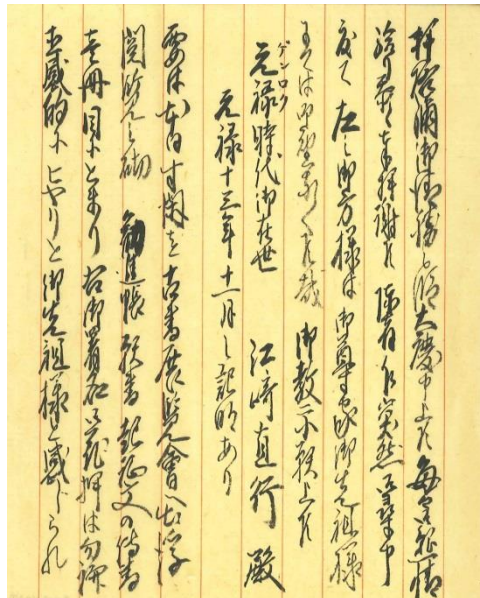
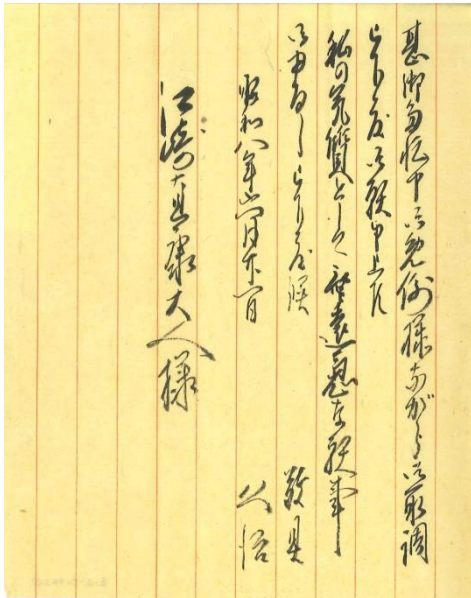
昭和7年12月15日付で、茂山久治(後の初世善竹弥五郎)が9世江崎直康(後の江崎金次郎)にあてた葉書。「郵便はがき」を使用し、葉書の表裏ともに墨書。内容は、先代の8世江崎文次郎直雄の芸事について、金剛右京談の記事が掲載された雑誌『金剛』を、直康あてに進呈したことが記されている。



21. 昭和八年六月二十一日付茂山久治より江崎直康あて書簡

罫紙便箋 1枚 昭和8年(1933)写 江崎家旧蔵資料蔵

昭和8年6月21日付で、茂山久治(後の初世善竹弥五郎)が9世江崎直康(後の江崎金次郎)にあてた封書。書簡本文は、赤色縦罫入の黄色便箋3枚に墨書されている。内容は、茂山久治が古書展覧会で購入した、「江崎直行」の署名・花押がある三読物の伝書について問い合わせたもの。



Ⅲ 初世梅若万三郎との共演

—三老女のワキをつとめる—

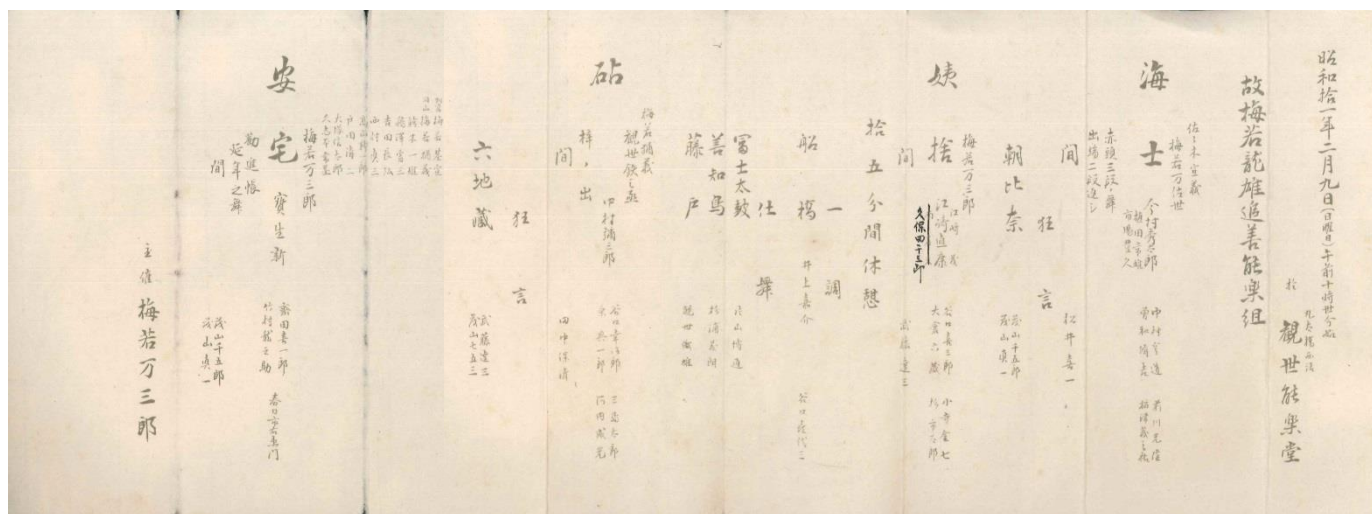
近代の名人と称された観世流シテ方の初世梅若万三郎（明治元年～昭和21年〔1868～1946〕）は、明治の三名人の一人に数えられる52世梅若六郎氏実（後の初世梅若実）の次男（実子としては長男）です。実弟の54世梅若六郎氏泰（後の2世梅若実）と義弟の6世観世銚之丞清実（号、華雪）とともに、梅若派の黄金時代を築いた能楽師として知られています。大正10年（1921）に梅若流を樹立し、初代家元にもなりました（後に観世流に復帰しています）。

晩年、万三郎は、老女物の中でも特に難曲とされる三老女のシテを関西の地で演じました。三老女とは《姨捨》《檜垣》《関寺小町》の3曲をさし、老女をシテとする老女物の能の中でも、とりわけ高度な技量と経験が必要な秘曲と位置づけられています。《姨捨》は昭和11年（1936）2月9日故梅若龍雄追善能（於京都観世能楽堂）、《檜垣》は昭和13年5月1日芸術院会員古稀祝賀・京都万謡会満十五周年記念能楽大会（於京都観世能楽堂）、《関寺小町》は昭和13年10月16日初世梅若万三郎古稀記念能（於大阪能楽殿）において舞台にかけられ、いずれの上演も万三郎の希望により福王流ワキ方の9世江崎金次郎直康がワキをつとめました。

22. 昭和十一年二月九日故梅若龍雄追善能楽組

一枚物 1枚 昭和11年（1936）刊 江崎家旧蔵資料蔵

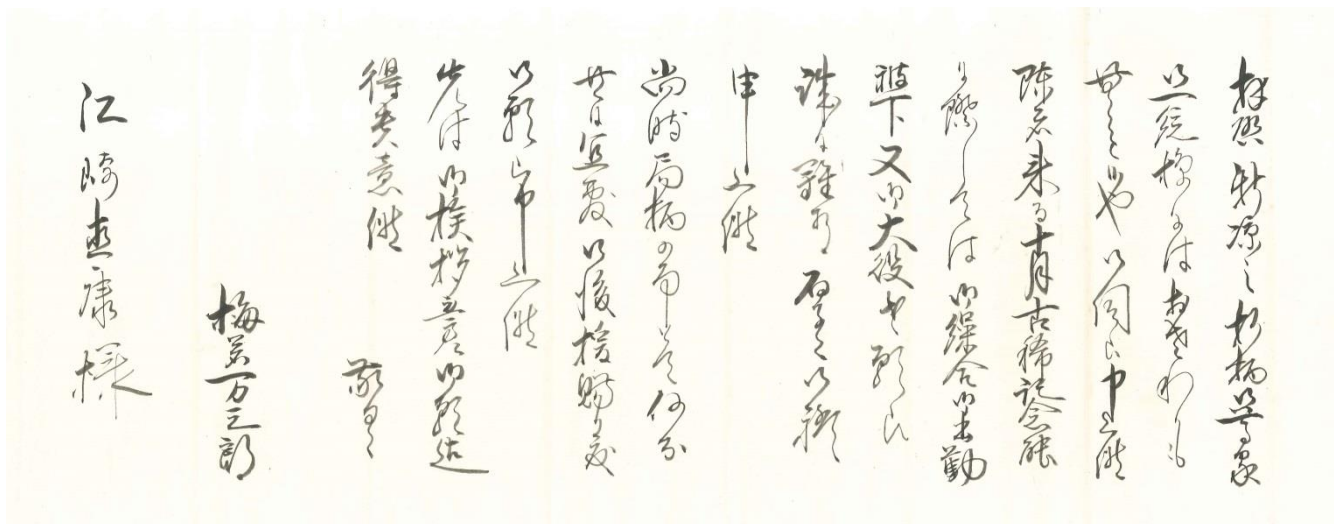
初世梅若万三郎主催で昭和11年2月9日に京都の観世能楽堂において開催された、故梅若龍雄追善能番組。能4番・一調1番・仕舞3番・狂言2番が上演された。故梅若龍雄は、早世した万三郎の三男。万三郎は、9世江崎直康がワキをつとめる能「姨捨」の他、番組の最後で「安宅」のシテも演じている。直康は「姨捨」で、ワキツレをつとめる息子の茂（後の10世江崎金治郎直質）と共演している。また、6世観世銚之丞清実がシテをつとめる「砦」に、12世中村弥三郎が出演している。



25. 昭和十三年九月十三日消印梅若万三郎より江崎直康あて書簡

継紙 1点 昭和13年(1938)写 江崎家旧蔵資料蔵

昭和10(3カ)年9月13日消印で、初世梅若万三郎が9世江崎金次郎直康にあてた封書。内容は、昭和13年10月16日開催の初世梅若万三郎古稀記念能(於大阪能楽殿)に出演する直康への挨拶状。直康は、この能会で《関寺小町》のワキをつとめた。



26. 梅若万三郎翁三老女記念画帖

紙本墨書・墨画 折本 1帖 昭和14年(1939)5月 沼艸雨筆
江崎家旧蔵資料蔵

近代の名人と称された観世流シテ方の初世梅若万三郎(明治元年～昭和21年〔1868～1946〕)が、関西において《姨捨》《檜垣》《関寺小町》の三老女を上演したことを記念して、沼艸雨(ぬまそうら)が作成し、福王流ワキ方の9世江崎金次郎直康に贈った画帖。《姨捨》は昭和11年(1936)2月9日故梅若龍雄追善能(於京都観世能楽堂)、《檜垣》は昭和13年5月1日芸術院会員古稀祝賀・京都万謡会満十五周年記念能楽大会(於京都観世能楽堂)、《関寺小町》は昭和13年10月16日初世梅若万三郎古稀記念能(於大阪能楽殿)において舞台にかけられ、いずれの上演も直康がワキをつとめた。画帖の前半には、序文のほか各曲の上演番組と能評が沼艸雨によって墨書されおり、後半には、沼艸雨が描いた各舞台の墨絵のスケッチが収められている。これらのうち能評は、沼艸雨



が能楽雑誌に発表した文章から、主に直康に関わる部分を抜粋したものである。筆者の沼艸雨は、昭和初期から能評・劇評を発表しつづけた関西を代表する能楽評論家。



「姨捨」

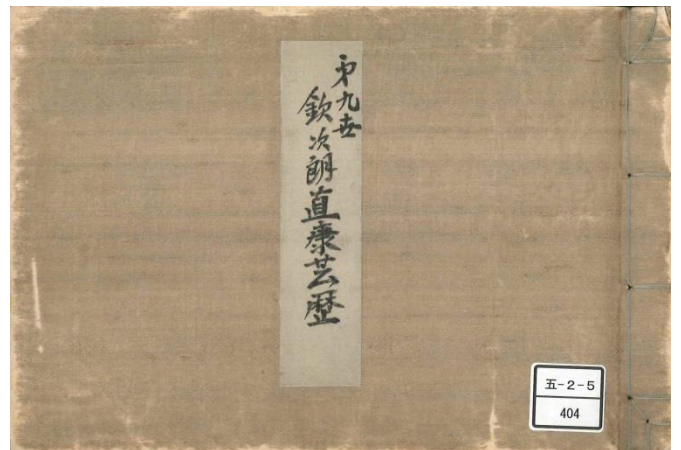
IV 華北演能旅行への参加

昭和6年（1931）9月に満洲事変が勃発すると、日本は長い戦争の時代に突入します。満洲事変の翌年に満洲国（現中国東北地方）が建国され、昭和12年7月に日中戦争が始まると戦時体制が強化されていきました。昭和16年12月には太平洋戦争が開戦し、昭和20年8月に敗戦を迎えました。9世江崎金次郎直康は、昭和17年10月4日から17日まで、北支（現中国華北地方）の天津神社本殿遷座祭における奉納能楽執行を目的とした華北演能旅行に参加し、あわせて北京・天津・満洲国奉天の中国北支の各都市で、皇軍（日本軍）慰問等を名目とした能楽公演を行いました。演能旅行を率いた大西信久は大阪在住の観世流シテ方であり、大阪観世会の統率者として活躍した人物です。江崎直康にとって、この演能旅行は思い出深い体験の一つだったらしく、『第九世欽次郎直康芸歴』（展示番号28）に詳しい手記が残る他、江崎家旧蔵資料には、演能旅行関係の資料が数多く所蔵されています。昭和17年秋頃には戦況はすでに悪化し始めていましたが、多くの日本人は、そのことを知りませんでした。

28. 第九世欽次郎直康芸歴

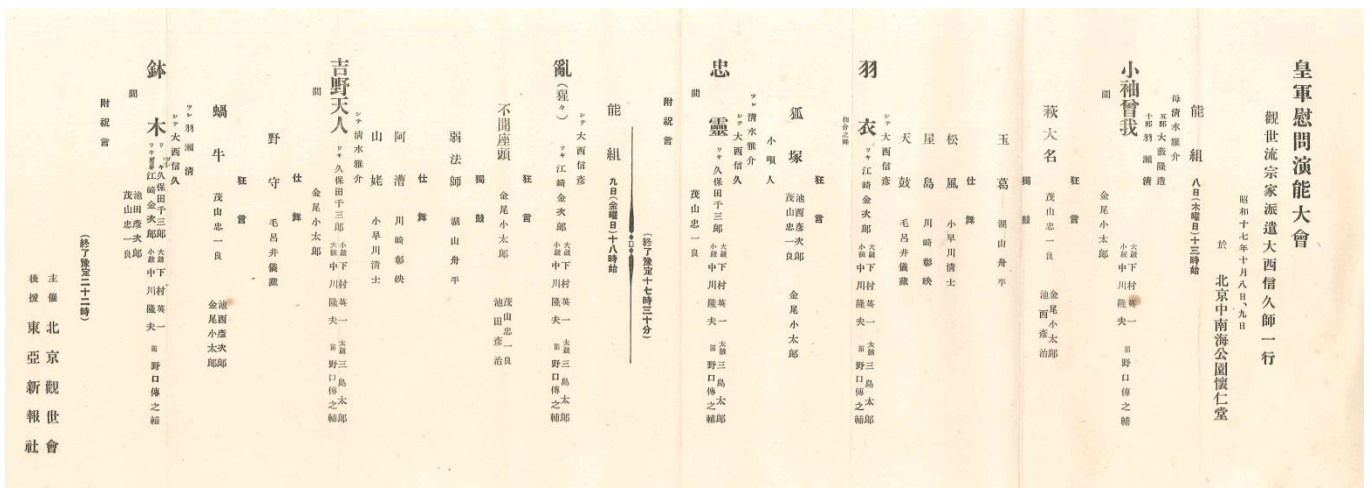
横中本 袋綴 1冊 昭和期 江崎正左衛門直康筆 江崎家旧蔵資料蔵

9世江崎正左衛門直康（菊次・金次郎・欽次郎）が自身の芸歴をまとめた書。明治38年（1905）3月から昭和44年（1969）5月までの出演記録と表彰歴を、ほぼ時系列に沿って記す。昭和45年11月に82歳で亡くなった直康が、亡くなるほど1年前に整理・編纂したものともみられ、すべて直康自身が執筆している。「昭和七年三月廿一日／（姫路市）公会堂能舞台建設」「昭和十七年十月／北支満洲皇軍慰問／天津神社遷座奉納」（展示番号29～31）「（昭和）廿五年三月十九日金次郎遷曆記念能」（展示番号42）についての記載は、特に詳しい。



29. 昭和十七年十月八日・九日皇軍慰問演能大会能組

一枚物 1枚 昭和17年（1942）刊 江崎家旧蔵資料蔵



昭和17年10月8日・9日に、北京中南海公園懷仁堂において開催された、大西信久率いる華北演能旅行一行による皇軍慰問演能番組。初日、二日目ともに、能3番・独鼓1番・仕舞3番・狂言2番・付祝言が上演された。9世江崎金次郎直康は、初日の能「羽衣」、二日目の能「乱(猩々)」「鉢木」のワキをつとめている。主催北京觀世会、後援東亜新報社。『東亜新報』は、1939年から日本敗戦の昭和20年まで、日本占領下の華北で発行されていた日本語新聞。

30. 昭和十七年十月十一日・十二日天津神社御遷座祭奉納能楽番組・
昭和十七年十月十二・十三日皇軍勇士慰問能楽会番組

一枚物 1枚 昭和17年(1942)刊 江崎家旧蔵資料蔵

天津神社御遷座祭奉納能楽番組

能楽番組

昭和十七年十月十一日(午後六時始)

於公會堂能樂臺

奉納能楽 一般ノ部
 神前奉納能楽
 大西信久
 江崎金次郎
 中川隆夫
 若原一
 若原三
 若原大太郎

羽衣
 大西信久
 江崎金次郎
 中川隆夫
 若原一
 若原三
 若原大太郎

鉢木
 大西信久
 江崎金次郎
 中川隆夫
 若原一
 若原三
 若原大太郎

小袖會我
 大西信久
 江崎金次郎
 中川隆夫
 若原一
 若原三
 若原大太郎

奉納能楽 一般ノ部
 昭和十七年十月十二日(午後六時始)
 於公會堂能樂臺

小袖會我
 大西信久
 江崎金次郎
 中川隆夫
 若原一
 若原三
 若原大太郎

狂言
 大西信久
 江崎金次郎
 中川隆夫
 若原一
 若原三
 若原大太郎

付祝言
 大西信久
 江崎金次郎
 中川隆夫
 若原一
 若原三
 若原大太郎

主 催 天津神社奉賛會
 後 援 天津松韻會

*番組表

皇軍勇士慰問能楽會

觀世流宗家派遣大西信久一行

昭和十七年十月十三日(正午始)

於公會堂能樂臺

忠靈
 大西信久
 江崎金次郎
 中川隆夫
 若原一
 若原三
 若原大太郎

狂言
 大西信久
 江崎金次郎
 中川隆夫
 若原一
 若原三
 若原大太郎

付祝言
 大西信久
 江崎金次郎
 中川隆夫
 若原一
 若原三
 若原大太郎

主 催 天津神社奉賛會
 後 援 天津松韻會

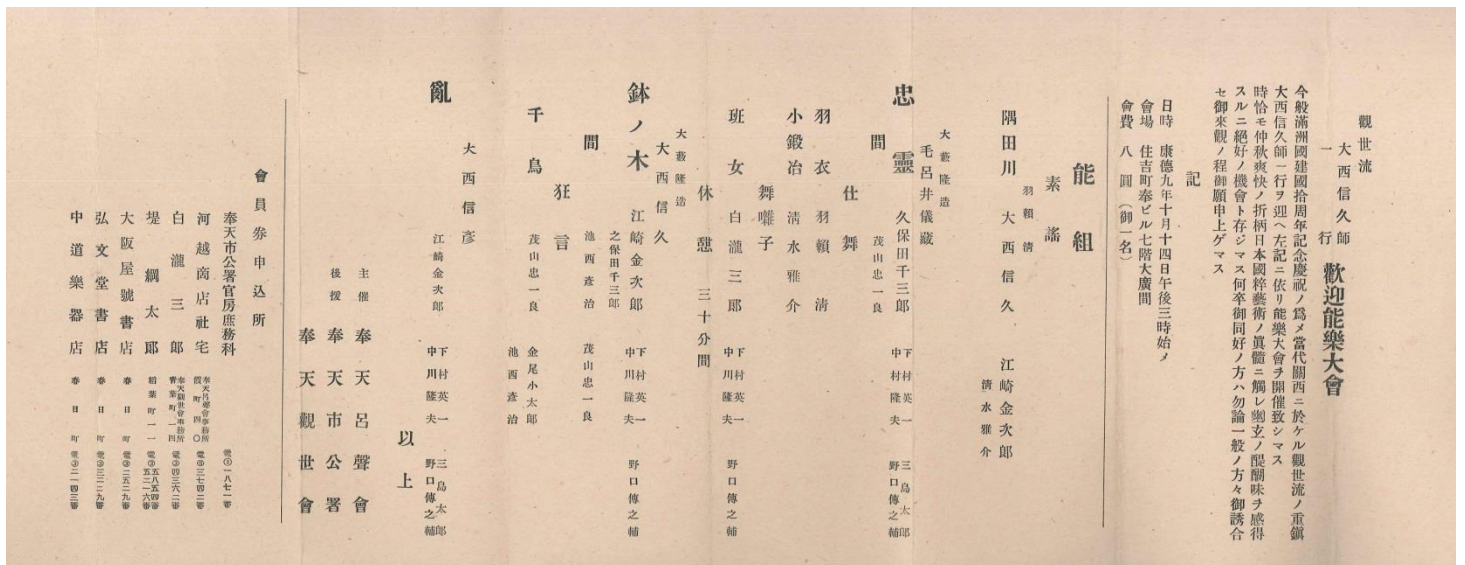
*番組裏

一面に天津神社御遷座祭奉納能楽番組、もう一面に皇軍勇士慰問能楽会番組を掲載した両面刷りの能番組。いずれも2日間の公演であり、天津神社御遷座祭奉納能は昭和17年10月11日・12日、皇軍勇士慰問能楽会は10月12日・13日に、天津にある公会堂能舞台において開催された。天津神社は天照大神と明治天皇を祭神とし、大正4年(1925)11月に創建された海外神社。この時の奉納能は二日間とも午後6時から開催され、一般向けに能2番・狂言2番(初日のみ付祝言がある)が上演された。9世江崎金次郎直康は、初日11日の一般向けの奉納能において能「鉢木」にワキで出演する他、それ先立ち同日午前11時に上演された「神前奉納能楽」においても「猩々」のワキをつとめた。一方の皇軍勇士慰問能楽会は、初日12日は午後1時から能2番・狂言1番・付祝言、二日目13日は正午から能2番・狂言2番・付祝言が上演された。直康は、初日の能「鉢木」にワキで出演している。二日目の最初の演目となる能「忠霊」は、昭和16年に大日本忠霊顕彰会の依頼により観世会委員会が制作した新作能で、英霊をシテとする。

31. 康徳九年十月十日観世流大西信久師一行歓迎能楽大会能組

一枚物 1枚 康徳9年(1942)年刊 江崎家旧蔵資料蔵

康徳9年(昭和17年)10月10日に、満洲国奉天(現遼寧省瀋陽)の住吉町奉ビル7階大広間で催された、大西信久率いる華北演能旅行一行による能番組。能3番・素謡1番・仕舞2番・舞囃子1番・狂言1番が上演された。9世江崎金次郎直康は、冒頭の素謡「隅田川」、能「鉢ノ木」「乱」に出演している。番組冒頭の挨拶文に、「今般満洲国建国拾周年記念慶祝ノ為メ当代関西ニ於ケル観世流ノ重鎮大西信久師一行ヲ迎へ左記ニ依リ能楽大会ヲ開催致シマス」とあり、主催奉天呂声会、後援奉天市公署・奉天観世会と記載されていることから、奉天の能楽愛好家グループと公署(役所)が中心となり、満洲国建国10周年記念の名目で開催した公演と知られる。奉天観世会事務所の代表者である白瀧三郎が、舞囃子「班女」のシテをつとめている。



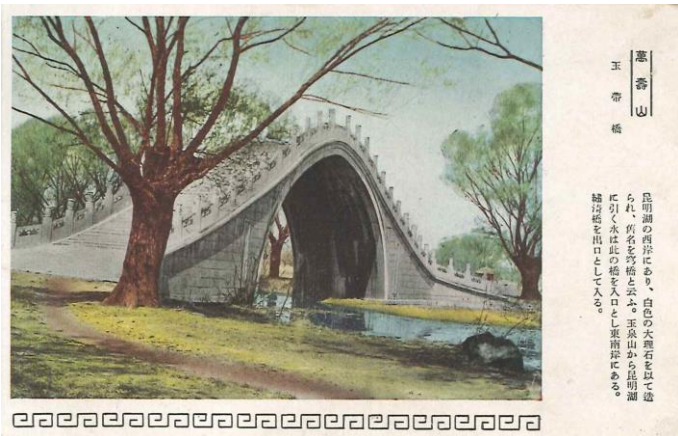
32. 昭和十七年十月七日付江崎金次郎より江崎直久あて書簡

絵葉書 1枚 昭和17年(1942)写 江崎家旧蔵資料蔵

昭和17年10月7日付で、9世江崎金次郎直康が、孫の江崎直久(10世江崎金治郎直質の長男)

にあてて北京から送った絵葉書。この時直久は満2歳であった。葉書裏に「萬壽山／玉帶橋」の彩色写真が印刷された「郵便はがき」を使用する。直康は昭和17年10月4日から同月17日にかけて華北演能旅行に参加しており、この葉書は、北京に到着した10月7日夜に書かれ、北京到着後の出来事を報告している。

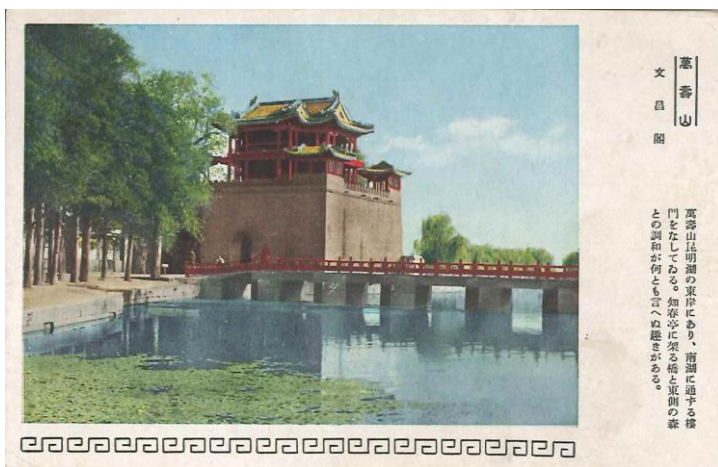
* 葉書裏



33. 昭和十七年十月十日江崎金次郎より江崎直久あて書簡

絵葉書 1枚 昭和17年(1942)写 江崎家旧蔵資料蔵

昭和17年10月10日に、9世江崎金次郎直康が、孫の江崎直久あてに北京から送った絵葉書。葉書裏に「萬壽山／文昌閣」の彩色写真が印刷された「郵便はがき」を使用する。直康は華北演能旅行に参加し、北京には10月7日夜に到着し同月10日夕方に出発した。10月10日は、中華民国の建国記念日である双十節(そうじゅうせつ)に当たり、万寿山を見物中と記されている。万寿山は、北京西郊の頤和園(いわえん)にある山名で、南麓に昆明湖(こんめいこ)をたたえる名勝地。



* 葉書裏

本日丸く通り命名致しました
初名 直久
母乳もたか分。非常之程可愛いから
安心あて奉公を祈る。
冬物目下整え申其の内よ送りませ
本日朝日カメラを送りました。
お日の能安公も喜ぶからした。
久保田君大機嫌ううくて海も志ました

34. 昭和十六年十月七日付江崎金次郎より江崎茂あて書簡

葉書 1枚 昭和16年(1941)写 江崎家旧蔵資料蔵

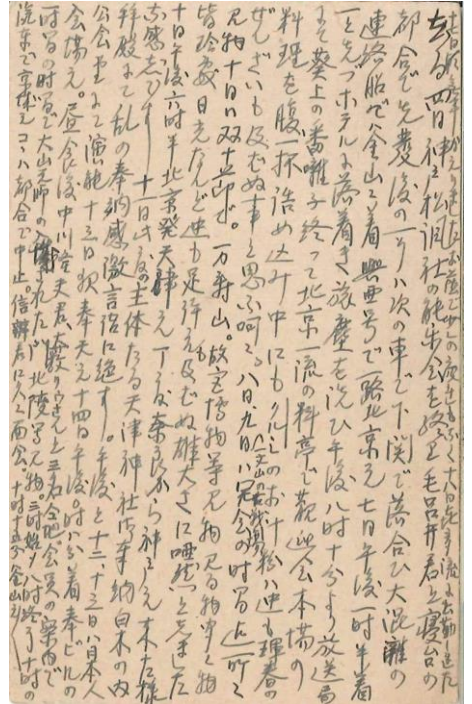
昭和16年10月7日付で、9世江崎金次郎直康が、息子の江崎茂(後の10世金治郎直質)へあてた葉書。「郵便はがき」を使用し、葉書の表裏ともに黒ペン書(差出人部分のみ黒印)。直康の孫で茂の長男にあたる江崎直久の命名について知らせる内容。その他、冬物を発送準備中、「朝日カメラ」を本日発送、10月5日の能会が盛会であったことを記す。この時期、茂は満洲に出征していた。葉書表「満洲間島省／琿春軍事郵便所気付／徳第二六四二部隊／江崎茂殿／10.7／姫路市延末町〇〇〇／江崎金次郎」。消印右下に「軍事郵便」の朱印が押されている。

35. 昭和十七年十月二十二日付江崎金次郎より江崎茂あて書簡

葉書 1枚 昭和17年(1942)写 江崎家旧蔵資料蔵

昭和17年10月22日付で、9世江崎金次郎直康が、満洲間島省に出征している息子の江崎茂(後の10世江崎金治郎直質)にあてた葉書。内容は、昭和17年10月4日から同月17日にかけて行わ

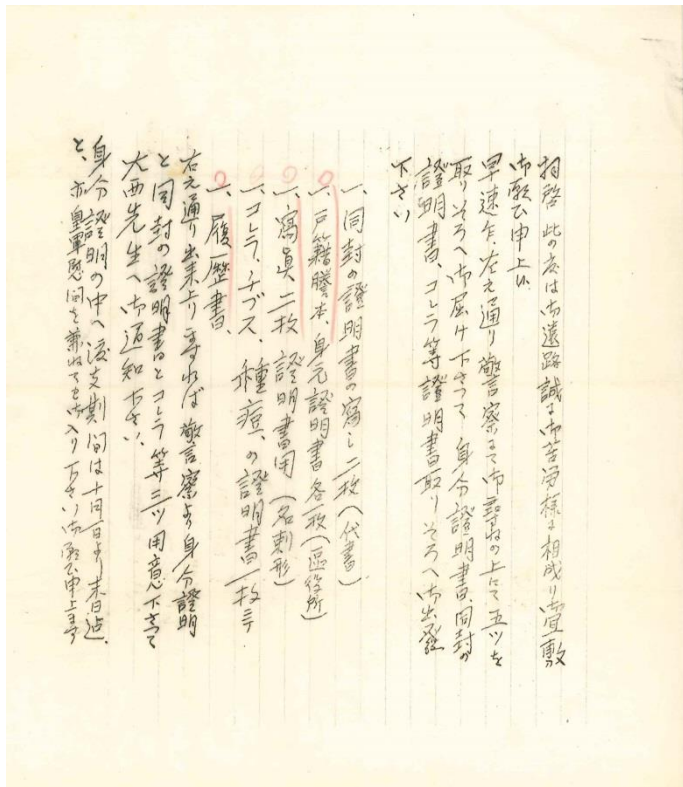
れた華北演能旅行の詳細な報告。「第九世欽次朗直康芸歴」(展示番号 28) と重複する部分が多い。葉書表「満洲間島省／琿春軍事郵便所気付／第二六四二部隊／唯尾隊／江崎茂様／姫路市延末町〇〇〇／江崎金次郎／10. 22.」。消印左横に「軍事郵便」の朱印が押されている。



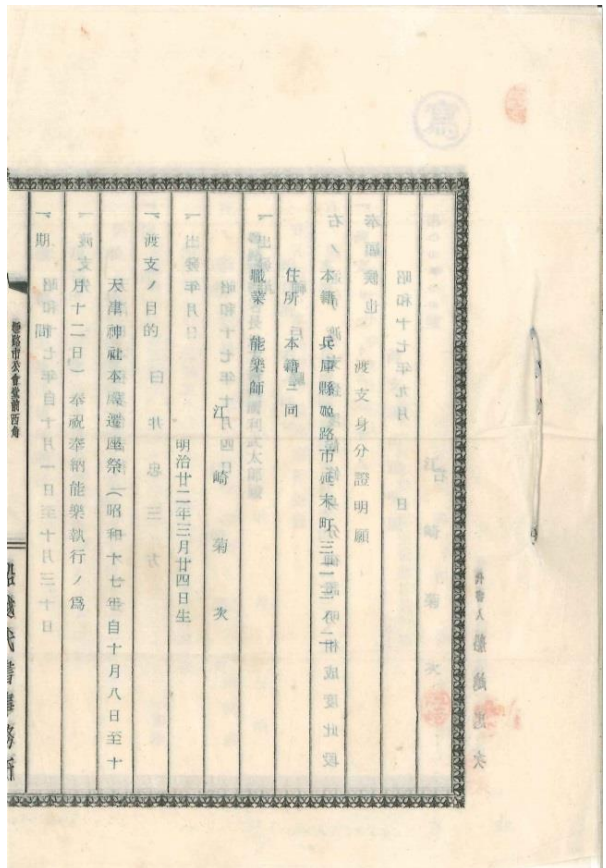
38. 渡支必要証明書取得依頼状

罫紙便箋 1枚 昭和 17 年 (1942) 刊
江崎家旧蔵資料蔵

華北演能旅行を実施するに当たり、中国へ渡航するのに必要な証明書等の取得を、9 世江崎金次郎直康に依頼した書簡。一つ書きで、以下の 5 種類の書類を取り揃えるよう指示している。「一、同封の証明書の写し二枚 (代書) / 一、戸籍謄本、身元証明書各一枚 (区役所) / 一、写真二枚証明書用 (名刺形) / 一、コレラ、チブス、種痘の証明書一枚ニテ / 一、履歴書」。書類が整えば「大西先生」に通知するよう書かれているが、この「大西先生」とは華北演能旅行を率いた大西信久を指すとみられる。華北演能旅行が昭和 17 年 10 月 4 日から同月 17 日にかけて行われていることから、この書簡が出されたのは旅行直前の同年 8 月～9 月頃であろう。カーボン紙による複写。



* 渡支必要証明書取得依頼状



* 渡支身分証明願・渡支事由証明願

39. 昭和十七年九月付渡支身分証明願・渡支事由証明願

半紙本 袋綴（仮綴） 1冊 昭和17年（1942）刊 江崎家旧蔵資料蔵

以下の2種類の証明願の合綴。

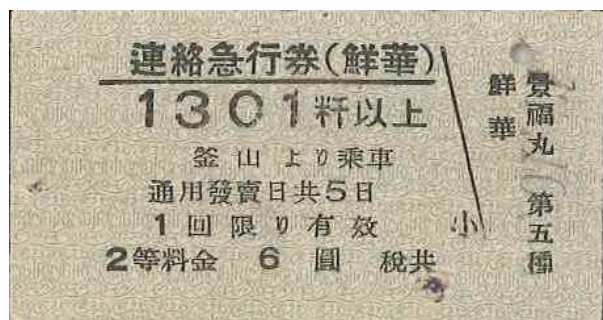
①江崎菊次（9世江崎金次郎直康）差出しの「渡支身分証明願」。昭和17年9月付で、宛先は姫路警察署長地方警視廣利武太郎。中国渡航の目的は「天津神社本殿遷座祭（昭和十七年自十月八日至十月十二日）奉祝奉納能楽執行ノ為」とある。②天津居留民団長・臼井忠三差出しの江崎菊次の「渡支事由証明願」。宛先は在天津日本総領事館警察署長となっており、昭和17年9月3日付で、在天津日本総領事館警察署長代理の外務省警部塚田道元が証明を行っている。中国渡航の目的は①と同じ。

①②とも、「姫路市公会堂前西角／電話一二九一番／船越代書事務所」と柱刻のある、同じ薄紙の縦野紙を使用し、合計3丁を紙縫りで穴2つの仮綴じにしている。文字はすべて青字の明朝体で印字されている。代書人は船越忠次。江崎菊次は、昭和17年10月4日から同月17日にかけて行われた華北演能旅行に参加しており、その時に揃えた書類の一つ。

40. 朝鮮中華民国間連絡切符

切符 1枚 昭和17年（1942）刊 江崎家旧蔵資料蔵

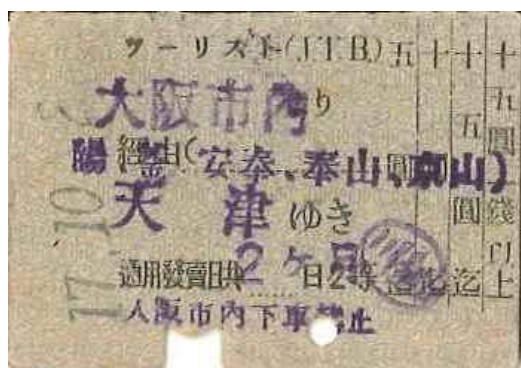
昭和17年10月に発券された、朝鮮～中華民国間の鉄道連絡切符。有効期限は5日間で、「連絡急行券（鮮華）」「釜山より乗車」と印刷されている。景福丸発売。9世江崎金次郎直康が、昭和17年10月4日から同月17日にかけて華北演能旅行に参加した時に使用したものの。



41. 大阪市内より天津ゆき切符

切符 1枚 昭和17年（1942）刊 江崎家旧蔵資料蔵

昭和17年10月に発券された、大阪市内～天津間の切符。有効期間は2ヶ月で、「陽、釜（安奉、奉山、京山）」のスタンプが押してある。日本旅行会社大阪安土町案内所発行。裏面に「江崎菊治」のペン書がある。9世江崎金次郎直康が、昭和17年10月4日から同月17日にかけて華北演能旅行に参加した時に使用したものの。



V 戦後の発展—昭和後期の江崎家—

太平洋戦争が終結すると、江崎家の人々は能楽復興に乗り出します。江崎家旧蔵資料には、昭和 20 年代以降の能番組が複数点所蔵され、9 世江崎金次郎直康と息子の直質が京阪神の舞台に出勤しながら、多くの門弟を育成した様子がうかがえます。昭和 37 年（1962）10 月には、社中の江崎福王会の門弟たちが集まり、江崎家芸道三百年記念素謡会が催されました。

昭和 38 年に 10 世江崎金治郎を襲名した直質は、昭和 46 年から始まった姫路薪能に協力して地元へ貢献する一方、関西ワキ方の重鎮として認められるようになり、昭和 50 年（1975）8 月には、NHK 教育テレビ放映の能のテレビ番組にも、後の人間国宝・豊島弥左衛門の相手役（ワキ）として出演しています。直質は几帳面で生真面目な人柄だったらしく、江崎家旧蔵資料には手製のワキの台本が多数所蔵されており、江崎家の芸を今に伝える貴重な資料となっています。

～近代の江崎家当主 その④～

10 世江崎金治郎直質

前名茂・後名正左衛門。大正元年生～昭和 62 年（1912～1987）76 歳没。

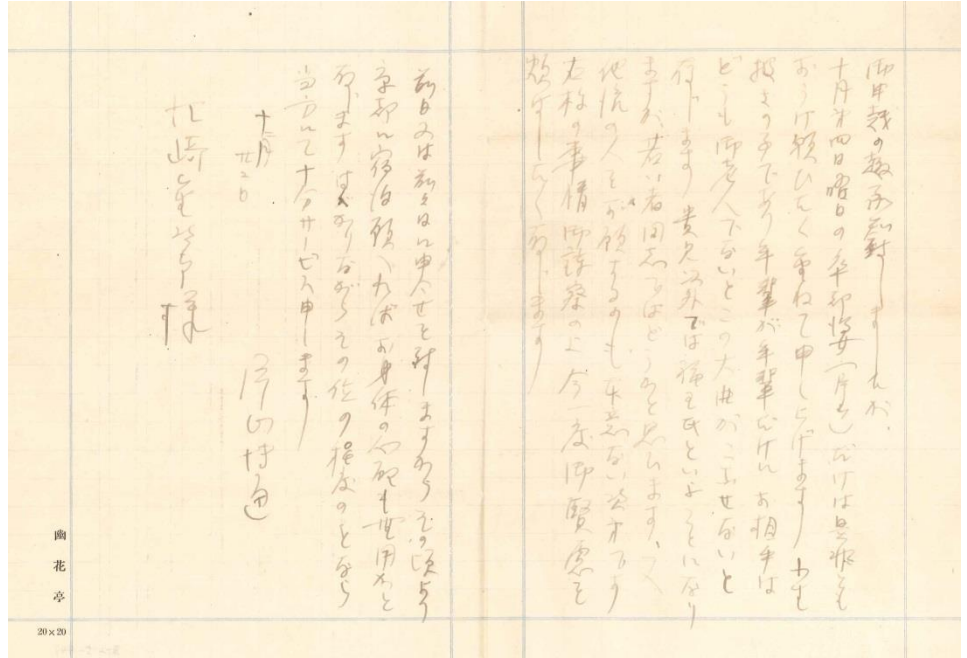
9 世江崎金次郎直康の長男。父に師事し、昭和 5 年（1928）に《花筐》で初ワキをつとめ、昭和 15 年に《道成寺》、昭和 23 年に《張良》を披いた。一時満洲に出征し（展示番号 34・35）、昭和 18 年に帰還、舞台に復帰した。昭和 38 年（1963）に 9 世直康の隠居により、10 世江崎金治郎を襲名。昭和 40 年には日本能楽会会員に認定される。昭和 46 年に始まった姫路城薪能の開催に大きく貢献し、以後、江崎家は毎回の出演を果たしている。昭和 55 年の姫路薪能では、脇能の小書（特殊演出）でワキ方の重い習いである「翁代（おきながわり）」を、110 年ぶりに復活上演した（展示番号 52（「翁代」型付）。また、昭和 55 年より兵庫県宍粟（しろう）市山崎町の山崎八幡神社奉納薪能においても中心的役割を果たし、その仕事は現在も江崎家に引き継がれている。昭和 50 年にテレビ放映された《葵上》（「無明之祈」の小書付き）では、後の人間国宝で金剛流シテ方の豊嶋弥左衛門の依頼に応じ、その相手役のワキを演じた（展示番号 46・47）。『能楽大事典』（2012 年筑摩書房刊）には、「故実に通じ、力感溢れる舞台であったが、晩年はいぶし銀を思わず芸風といわれ、阪神能楽界に重きをなした」との評価が記載されている。昭和 59 年（1984）隠居、正左衛門を襲名し、次男康雄が 11 世江崎金治郎を継承した。

36. 年未詳十二月二十二日付片山博通より江崎金次郎あて書簡

A4 横判 原稿用紙 1 枚 昭和期写 江崎家旧蔵資料蔵

年未詳 12 月 22 日付で、京都の観世流シテ方 8 世片山博通が、9 世江崎金次郎直康にあてた封書。

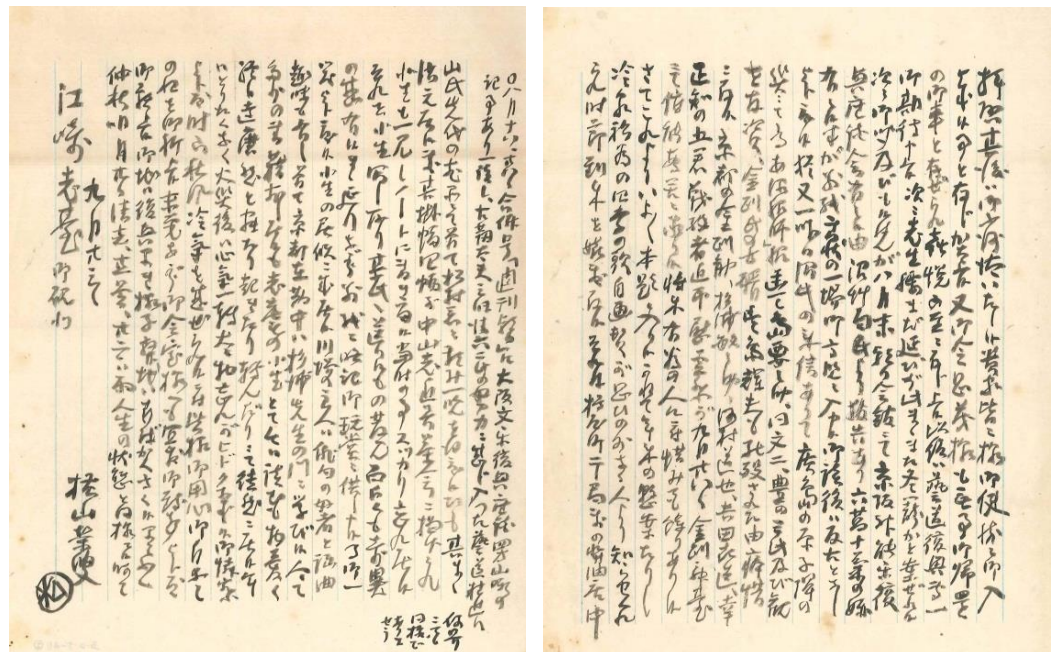
「幽花亭」と欄外に印刷された、400 字詰縦判原稿用紙 1 枚にペン書。内容は、片山博通が「十月第四日曜日」に《卒都婆小町》を披くにあたり、相手役のワキに直康の出演を依頼したもの。片山博通は昭和 22 年（1947）5 月に金剛能楽堂において《卒都婆小町》を披いており、この書簡は、その出演者を決める時期に書かれたと推測される（開催日は 10 月の予定が 5 月に変更となったか）。ただし、この時の上演ではワキは高安流の西村弘敬がつとめており、片山博通の希望は成就しなかったらしい。



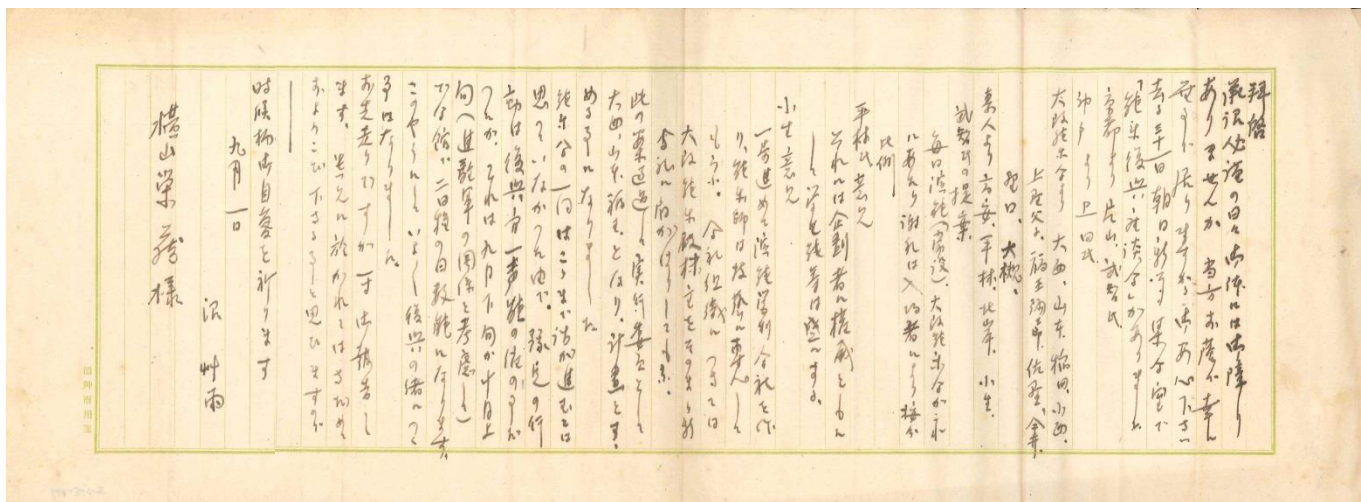
37. 昭和二十年九月二十三日付横山栄蔵より江崎金次郎あて書簡

罫紙便箋 3 枚 昭和 20 年（1945）写 江崎家旧蔵資料蔵

終戦後間もない昭和 20 年 9 月 23 日に、横山栄蔵（杣人）が 9 世江崎金次郎直康に送った封書。手紙の前半に戦後の関西能楽界の状況が記されており、直康の長男茂（後の 10 世江崎金治郎直質）が無事帰還したこと、京阪神能楽復興座談会が実施されたこと、能楽師の戦没者追悼慰霊祭が開催予定であることが知られる。また、この手紙には、昭和 20 年 9 月 1 日付で沼艸雨が横山栄蔵に送った手紙 1 枚が同封されており、沼による京阪神能楽復興座談会の詳細な報告が、直康のもとに転送されている。横山栄蔵（杣人）は関西における能楽研究の草分け的存在の一人で、直康とは特に親交が深か



った。なお、本資料については『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』11号に翻刻が載る。



*昭和20年9月1日付沼州雨同封書簡

42. 昭和二十五年三月十九日江崎金次郎還暦記念能楽会番組

一枚物 1枚 昭和25年(1950)刊 江崎家旧蔵資料蔵

昭和25年3月19日に、9世江崎金次郎直康の還暦を記念して、姫路市公会堂において開催された能楽会番組。能4番・舞囃子1番・連吟1番・独吟2番・仕舞6番・狂言2番が上演された。直康は、能「敦盛」にワキの蓮生法師(熊谷直実)役で出演した他、大西信久がシテ、信久の長男智久が子方をつとめた能「鳥追舟」においてもワキを演じ、ワキツレの息子直質(後の10世江崎金治郎)と共演している(この時の「鳥追舟」は、シテ方・ワキ方ともに父子共演という凝った趣向が取られている)。また、15世福王茂十郎(12世中村弥三郎)も、能「蟬丸」のワキで出演している。ちなみに、狂言「二人袴」に出演し、能「蟬丸」の間狂言をつとめた山口蓼洲(りょうしゅう)は、京都の大蔵流狂言師兼日本画家である。この公演は、姫路市を中心とする播磨の能楽愛好家が結成した播磨能楽会の主催により、昭和25年度定時総会として催された。番組の裏面に記載された「播磨能楽会の沿革」によると、播磨能楽会の前身は昭和15年に設立した姫路能楽会であり、毎年2回の能楽鑑賞を行い能楽の普及につとめてきたが、太平洋戦争により中断し、終戦後の昭和22年に播磨能楽会と改称して再結成されたとある。また、その事業内容は、能楽研究や観能の他、「能楽技術

昭和二十五年定時総会
江崎金次郎
還暦記念
能楽会

日時 昭和二十五年三月十九日(日曜日)午前十時始曲
場所 姫路市公会堂

1596

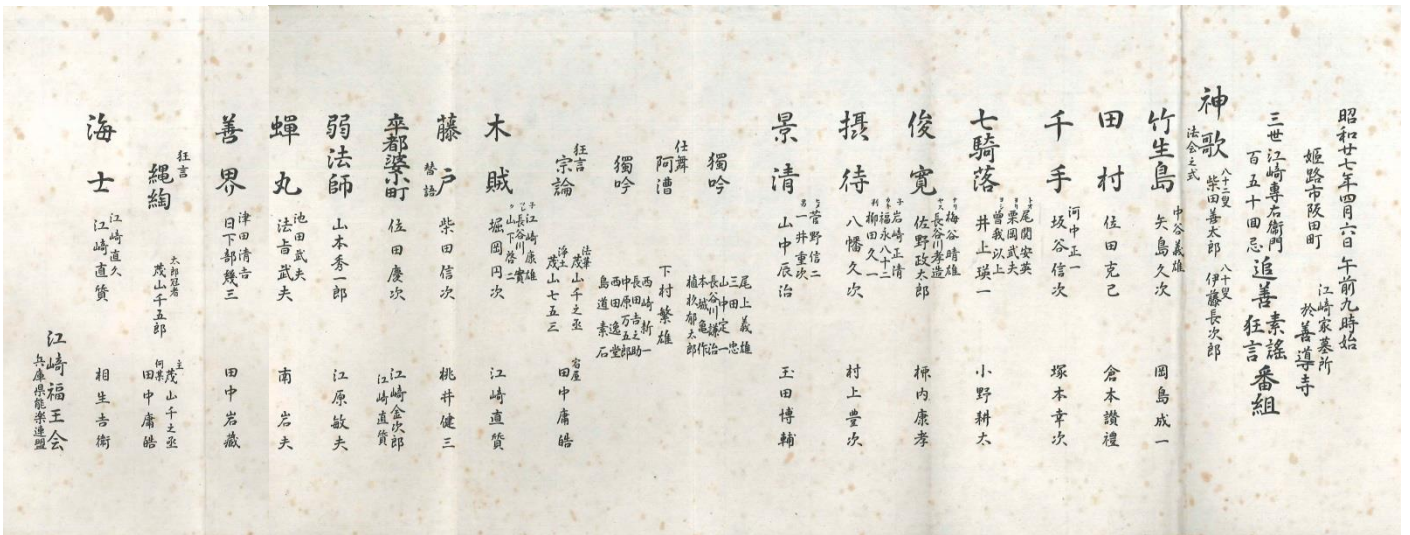
<p>高砂</p> <p>祝言之式 杉浦義雨</p> <p>主 催 播 磨 能</p>	<p>鳥追舟</p> <p>大西信久 大西智久</p> <p>間 田中康徳</p> <p>友近江崎直賢 日事江崎金次郎 大倉六藏</p> <p>齊田喜兵衛 野口傳之體</p>	<p>蟬丸</p> <p>菅 榮 東 間 山口蓼洲</p> <p>福王茂十郎 曾和博朗 森田光次</p>	<p>二人袴</p> <p>狂言</p> <p>山口蓼洲</p>	<p>敦盛</p> <p>蓮生法師</p> <p>大西信久 大西智久</p> <p>齊田喜兵衛 野口傳之體</p>
---	---	--	----------------------------------	---

の向上、古典の再認識、能楽による生活文化の向上等あらゆる部面よりの多角的研究による能楽普及」と記され、戦後の姫路を中心とした地域の能楽振興を目指したものとなっている。江崎直康と直質は、こうした地元の能楽普及活動にも参加していた。

43. 昭和二十七年四月六日三世江崎専右衛門百五十回忌追善素謡狂言番組

一枚物 1枚 昭和27年(1952)刊 江崎家旧蔵資料蔵

昭和27年4月6日に、江崎家の墓所がある姫路市の善導寺において開催された、3世江崎専右衛門直信(寛政9年〔1797〕没)の百五十回忌追善素謡狂言会の番組。素謡15番・独吟11番・仕舞1番・狂言2番が上演された。江崎家の人々は、「木賊」に江崎康雄(後の11世江崎金治郎)・江崎直質(後の10世江崎金治郎)、「卒都婆小町」に9世江崎金次郎直康・直質、「海士」に江崎直久(直質の長男)・直質が出演している。主催は、江崎家社中の江崎福王会であり、多くの門弟が顔を揃えている。また、最初の「神歌」には、7世江崎金左衛門直郷時代からの門弟・柴田善太郎が出演している。



44. 昭和四十八年五月二十七日能楽殿完工一周年記念祝賀能番組

一枚物(折加工) 1枚 昭和48年(1973)刊 江崎家旧蔵資料蔵

昭和48年5月27日に、湊川神社境内の神戸能楽殿の竣工一周年を記念して開催された祝賀能番組。午前と午後の2部制の公演となっており、第1部は能3番・舞囃子1番・仕舞5番・狂言1番・付祝言、第2部は能3番・舞囃子1番・独吟1番・仕舞4番・狂言1番・付祝言が上演された。10世江崎金治郎直質は、第1部の能「熊野」でシテの観世元正の相手役であるワキをつとめ、ワキツレの息子康雄(後の11世江崎金治郎)と共演している。神戸能楽殿は、昭和47年の湊川神社鎮座100年祭記念事業の一環として、東京大曲にあった観世会館の舞台を移設して建てられた能楽堂で、祭神楠木正成の系譜に連なるといふ25世観世宗家の観世元正の尽力によって完成した。昭和57年より「神能殿」と称するようになり、平成21年(2009)1月に一時休館となったが、同25年12月に再開した。能舞台は、総檜造り檜皮葺入母屋破風屋根の本格的な様式となっている。

46. 昭和五十年七月二十二日付豊嶋弥左衛門より江崎金治郎あて書簡

B5 変型縦判 罫紙便箋 3枚 昭和50年(1975)写

江崎家旧蔵資料蔵

昭和50年7月22日付で、京都在住の金剛流シテ方豊嶋弥左衛門(後の人間国宝)が、福王流ワキ方10世江崎金治郎直質にあてた封書。縦罫入り洋紙便箋3枚に黒色のサインペン書き(ただし、《葵上・無明之祈》の演出上の注意点を記した部分は、緑色と赤色のサインペンも使用)。内容は、まず、同年9月18日に録画予定の「テレビ能」への出演依頼を、直質が承諾したことに謝意を述べ、次に、録画予定の能《葵上・無明之祈》の演出上の注意点を一つ書きで記す。この時の演能は、同年10月10日に、NHK教育「能」にて放映され、録画映像がDVD『能楽名演集「黒塚」「葵上』』としてNHKエンタープライズ出版から販売された。出演者には関西の名手が名を連ね、直質(ワキ)は息子の康雄(ワキツレ・後の11世江崎金治郎)と共演している。

*書簡1枚

47. 昭和五十年八月三十一日付豊嶋弥左衛門より江崎金治郎あて書簡

B5 変型縦判 罫紙便箋 2枚 昭和50年(1975)写 江崎家旧蔵資料蔵

昭和50年8月31日付で、京都在住の金剛流シテ方豊嶋弥左衛門(後の人間国宝)が、10世江崎金治郎直質にあてた書簡。縦罫入り洋紙便箋2枚に黒色のサインペン書き。「昭和五十年七月二十二日付豊嶋弥左衛門より江崎金治郎あて書簡」(展示番号46)に関連して送られた書簡で、同年9月18日に京都観世会館にて行われる「テレビ能」の録画について、当日の時間割と上演曲《葵上・無明之祈》の番組、一つ書きにした注意点を知らせる。この時の演能は、同年10月10日に、NHK教育テレビ「能」にて放映され、NHKエンタープライズ出版のDVD『能楽名演集「黒塚」「葵上』』に収録されている。

DVD 能楽名演集「黒塚」「葵上」

(NHK エンタープライズ)

〈演目〉能「葵上・無明之祈」(金剛流)

〈出演者〉

シテ：豊嶋弥左衛門(人間国宝)

ツレ：豊嶋三千春

ワキ：江崎金治郎(10世直質)

ワキツレ：江崎康雄(11世金治郎)

アイ：3世茂山千作(人間国宝)

笛：森田光春

小鼓：曾和正博

大鼓：谷口喜代三

太鼓：小寺俊三

後見：種田治郎・廣田泰三・重本昌三

地謡：地頭2世金剛巖・副地頭今井幾三郎

金剛永謹・廣田陸一・谷口宗義・今井清隆・宇高通成

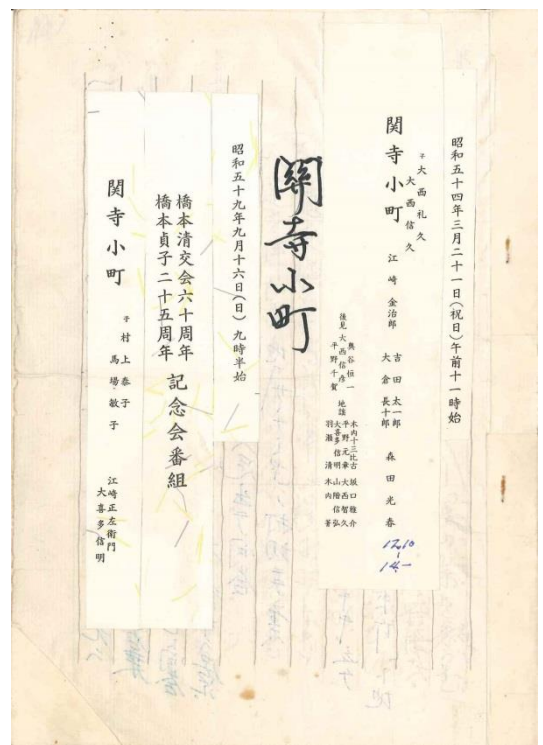
(1975年10月10日NHK教育「能」にて放送)

*書簡1枚目

48. 「関寺小町」脇セリフ

B5 縦判 単葉装 (ホチキス綴) 1冊 昭和期写
江崎家旧蔵資料蔵

能《関寺小町》のワキのセリフと謡部分を、すべて抜き出したもの。ワキに対応するシテの詞章も、部分的に記載されている。B5 縦判洋罫紙便箋7枚の表側に詞章本文を記し、左上端に「No.1~6」の通し番号を施す。すべて同筆で青インクの万年筆書きだが、所々に赤ボールペンで振り仮名などが施されている。また、表紙(便箋1枚目)の裏側には、青と赤のボールペン書きで型付が記されている。本冊は10世江崎正左衛門直質が執筆・作成したとみられ、直質が《関寺小町》のワキを勤めた昭和13年(1938)から昭和59年(1984)までの出演記録が、最終7枚目の便箋裏側に列記されている。表紙中央に「関寺小町」とサインペンで直書され、その題字の左右に、直質が《関寺小町》に出演した、昭和54年3月21日大西信久初舞台七十年記念祝賀能番組(能に出演)と、昭和59年9月16日橋本清交会六十周年・橋本貞子二十五周年記念会番組(素謡に出演)の該当部分の切り抜きが貼付されている。

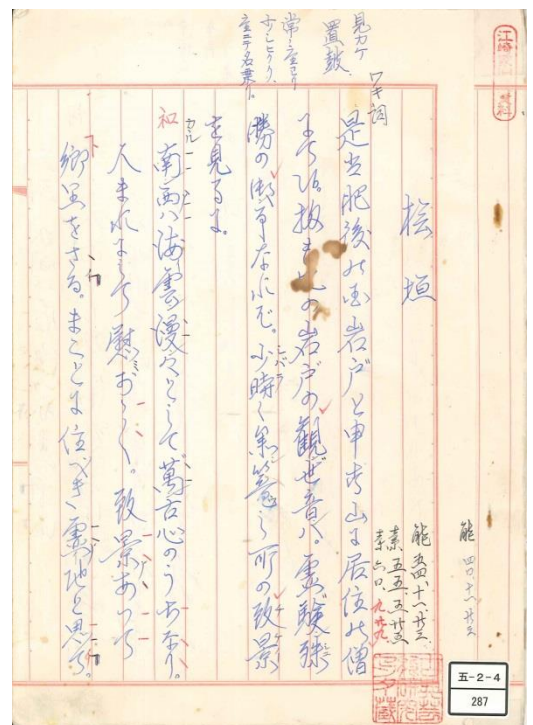


33

49. 「檜垣」脇セリフ

B5 縦判 単葉装 (ホチキス綴・糊綴) 1冊 昭和期写
江崎家旧蔵資料蔵

能《檜垣》のワキの詞章を、アイとの応答部分を除き、すべて抜き出したもの。ワキに対応する観世流のシテの詞章も、省略しつつ記されている。料紙は、B4判縦罫入り原稿用紙を縦半分に裁断したものを使用しており、裁断してB5サイズとなった原稿用紙の両面に詞章がペン書きされている。また、原稿用紙はボール紙の台紙とともにホチキスで綴じられ、背が糊付けされている。10世江崎金治郎直質が執筆・作成したものとみられ、直質が《檜垣》の素謡をつとめた昭和55年(1980)25日大喜多秀諷社二十周年記念大会の番組と、同じく直質が《檜垣》のワキを勤めた昭和54年11月23日大西信久先生喜寿祝賀別会能の予告用リーフレットが、末尾に合綴されている。



50. 「姨捨」脇セリフ

B5 横判 単葉装 (ホチキス綴) 1冊 昭和期写 江崎家旧蔵資料蔵

能《姨捨》のワキの詞章を、アイとの応答部分を除き、すべて抜き出したもの。ワキに対応する観世流のシテの詞章も、省略しつつ記されている。冒頭の曲名下側に「昭和四十三年十月廿三日」

と演能年月日が記され、本資料はその時に作成されたものらしい。「姫路市立神南中学校」と印字された横罫入りレポート用紙を縦書きに使用し、料紙の片面のみに詞章がペン書きされている。10世江崎金治郎直質が執筆・作成したものとみられ、直質が《姨捨》のワキを勤めた昭和35年から昭和59年までの演能記録が、最終丁の裏面に列記されている。

51. 「芭蕉」脇セリフ

B5 縦判 単葉装（ホチキス綴） 1冊 昭和期写 江崎家旧蔵資料蔵

能《芭蕉》のワキのセリフと謡部分を、すべて抜き出したもの。ワキに対応するシテの詞章も、省略を交えながら記載されている。B5 縦判洋罫紙便箋6枚の表側に詞章本文を記し、左上端に「No. 1～6」の通し番号を施す。さらに、便箋の裏側に、ワキ型付、ワキとアイの対応部分からワキのセリフの抄出、シテの詞章の補記、演能記録などを記す。すべて同筆で大半が青インクの万年筆書きだが、便箋表側の詞章本文には、ところどころ赤ボールペンで振り仮名などが施され、便箋裏側には墨筆、赤鉛筆、黒ペン書きの箇所が散見する。筆跡から10世江崎金治郎直質が執筆・作成したものとみられる。No.5の便箋裏側に、直質が「芭蕉」のワキを勤めた昭和53年（1978）月17日京都観世会定期能（シテ片山博太郎）と、同じく昭和57年9月12日神戸観世会定期能（シテ観世元正）の演能記録が記されていることから、本資料は、これらの上演時に、直質が実際に演じた内容を記載したものと推定される。洋罫紙便箋6枚の右端2カ所をホチキスで綴じ、綴じ部分のみ包背装となっている。

52. 「翁代」型付

B5 横判 単葉装（ホチキス綴） 1冊 昭和期写 江崎家旧蔵資料蔵

脇能の小書（こがき・特殊演出）「翁代（おきながわり）」の型付。非常に重いワキの習いで、この小書がつくと、《翁》の上演がなくなり、代わりに脇能の冒頭にワキが《翁》のシテのような所作をする。昭和55年（1980）8月2日の姫路薪能において、10世江崎金治郎直質が、能《高砂》の小書として103年ぶりに復活させた。この型付は、その時に直質が執筆したものとみられる。横罫入りレポート用紙3枚に万年筆で縦書きに執筆され、ホチキス綴じにされている。

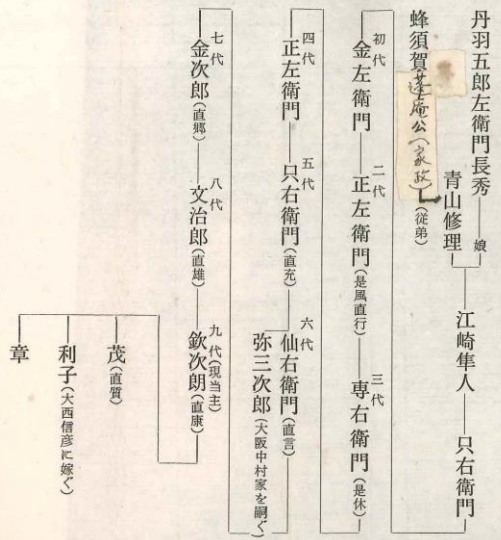
江崎家小譜

江崎家先祖の青山修理は丹羽五郎左衛門長秀の娘婿で蜂須賀蓬庵公家政とは従弟の間柄であった。修理の孫準人の代に故有つて蓬庵公から江崎姓を賜つた。準人の子只右衛門は能、謡を唯一の楽しみとし自筆の謠名寄本の奥書に寛永二年五月十三日（一六二五年）とあり、その他数々の謠曲写本を残し京都にて病死した。只右衛門の子金左衛門も亦、能、謡を好み明暦年間（一六五四年）より斯道を生業としました。此の金左衛門を以て江崎家芸道の初代とします。

京都、膳所、伏見、若州等に数多の門人が有りましたが、元禄八年（一六九五年）時の姫路城主本多中務政武公にお能御用として招かれ姫路に移住、以来慶応三年十二月王政復古の大王令迄代々の城主にお能御用として仕え、明治四年八月最後の城主酒井忠邦公墓参旁引払いのため旧領地に帰国、同年九月一日城内にて名残りのお能を献じ其の節御紋のお羽織を拝領しました。初代正左衛門より七代金次郎直郷迄のお能御用も之が最後であった。現欽次郎直康第九世を継承今日に至る。

昭和三十七年十月

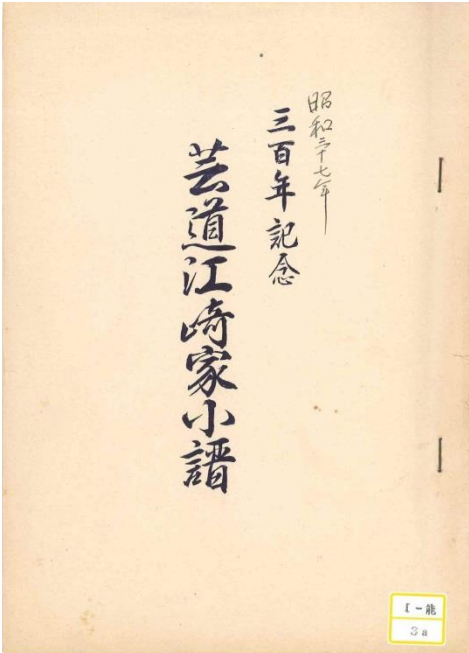
江崎家略系図



欽次郎直康記

であろう。

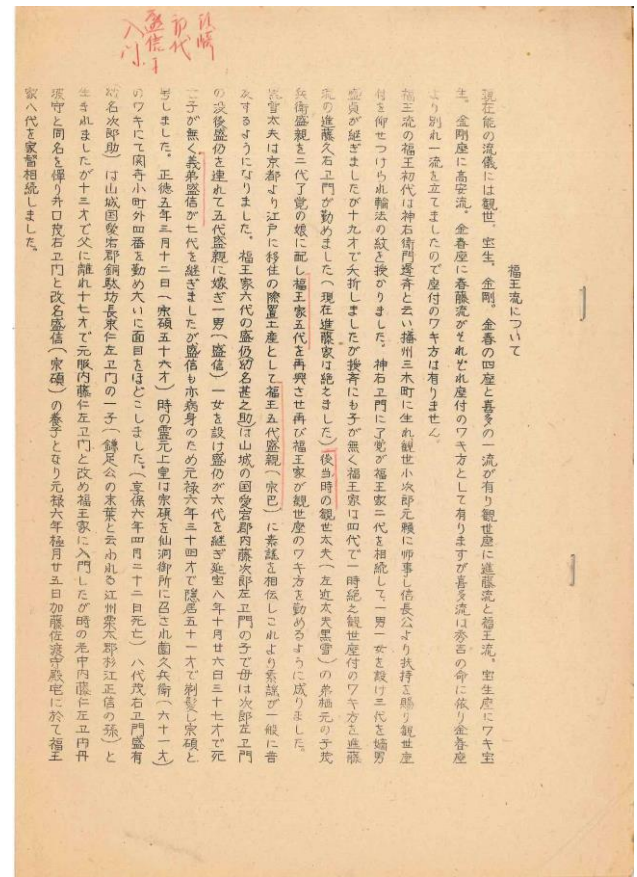
*小譜・系図部分



54. 三百年記念芸道江崎家小譜

B5 縦判 袋綴 (ホチキス綴) 1冊 昭和37年 (1962) 刊
江崎家旧蔵資料蔵

表紙を含めざら紙3枚を袋綴じにした、ガリ版刷りの小冊子。表紙裏に「江崎家略系図」、1丁表から3丁裏にかけて「江崎家小譜」が印刷されている。9世江崎欽次郎直康が執筆・作成したもので、「昭和三十七年五月二十日」の自序があることから、同年10月14日に開催された江崎家芸道三百年記念素謡会の際に印刷され、関係者に配布されたものか。同じ小冊子2冊を展示したが、その内1冊には、「江崎家小譜」の最後に記載された「江崎欽次郎直康」の項目に、10世金治朗直質による貼り紙があり、内容が補訂されている。



55. 福王流について

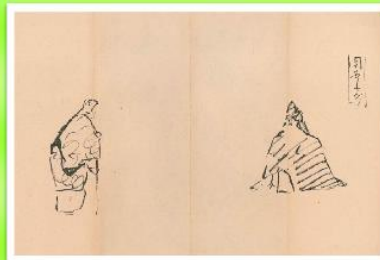
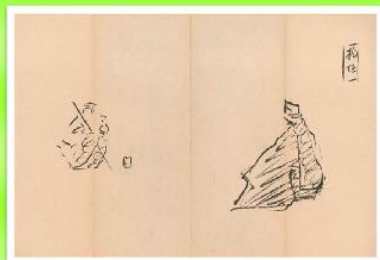
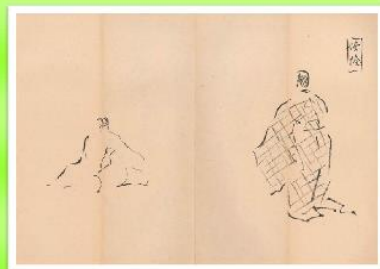
B5 縦判 袋綴 (ホチキス綴) 1冊
昭和38年 (1963) 刊 江崎家旧蔵資料蔵

ワキ方福王流および江崎家の歴史について記した小冊子。ざら紙2枚にガリ版刷りされている。末尾

江崎家の近代

—福王流ワキ方能楽師の明治・大正・昭和—

期間：二〇二一年三月一日（月）～四月三十日（金）
午前十時～午後五時 土日祝日休室
場所：神戸女子大学古典芸能研究センター展示室



沼仲雨筆「梅若万三郎翁三老女記念圖帖」
上「姨捨」中「檜垣」下「関寺小町」

ワキ方福王流の名門・江崎家は、江戸時代から三百年以上にわたって、姫路を拠点に活動を続けてきました。二〇一五年度、神戸女子大学古典芸能研究センターは、江崎家から約千点にのぼる貴重な能楽資料の寄贈を受け、二〇一六年には一部の資料を用いた企画展を開催しました。このたび、江崎家旧蔵資料を紹介する第二回目の展示を、近代の江崎家をテーマに行います。明治・大正・昭和という激動の時代に、江崎家の代々の当主は、どのような活動を通して能楽を守り広めていったのでしょうか。その足跡を数々の資料とともに辿ります。

*「江崎家の近代」展示チラシ

思出の昔の秋の月影を老のたもとにうつしてそ舞ふ
汲みあけし釣瓶の水にみつはくむ老のすかたのうつるやさしさ
関寺の鐘のひゞきと消え入りて袂に残る百年のゆめ

昭和十一年二月 姨捨を相勤
同 十三年五月 檜垣 三老女御相手を願記念
同 十三年十月 関寺小町

江崎君 七十一翁 梅若万三郎（朱陰方印）（朱陽方印）

*三老女記念和歌三首翻刻

神戸女子大学古典芸能研究センター展示

江崎家の近代—福王流ワキ方能楽師の明治・大正・昭和—

期間：2021年3月1日（月）～4月30日（金）

場所：神戸女子大学古典芸能研究センター展示室

2021年4月30日 発行

〔編集・発行〕

神戸女子大学古典芸能研究センター（展示担当：長田あかね）

〒650-0004 神戸市中央区中山手通2丁目23-1

神戸女子大学教育センター2階 電話(078)231-1061